併し之が流行して、人家稠密なる處に發生すれば、恰も暴風が一時に襲來する勢の如くに、猛烈なる勢を以て、一時に擴つて來るものである。是れは體質の良い人と惡い人、或は行狀等に依つて、同じく流行性眼炎に罹つても、輕重の差あることは勿論である、さうして是れは毎年流行すると云ふのではなく、多くは三年目とか、五年目とかに流行するやうである、其流行する季節は何時も春とか秋とか云ふ時候の温和な時に、發生する疾患である、大抵其の起る本は不潔なる所の漁村とか農村とか、等から發生するのである。併し之が一度發生して、今度他に傳染すると云ふ場合には、貧富の別なく一般に禍を受けるものである。

四　流行性眼炎と小學校

殊に小學校などに此の病毒が侵入すると、實に恐るべき勢を以て兒童を襲擊するのである、初めは一人の患者が本を成して、兎角運動場などに於て、數多の兒童に傳染し勝である。近來小學敎育は全國に行渡つて居るけれども、其の校舍の構造と云ふものは、各々區々になつて居る、隨分文部當局者も、建築法に就いては苦心されて、其の訓令等も出されて居るけれども、詰り其の土地の經濟と云ふものに任せてあるので、經濟の程度問題になつて居るから、中には隨分驚くべき程、衛生的の建築に適つたる完全した校舍も見るけれども、又甚しきに至ると、昔の寺小屋に髣髴たるやうな校舍もある地方は比較的建築する場所も、廣く取つてあるし周圍も廣いから、空氣の流通も宜しい譯であるが、人家稠密したる都會の地に在つては、其の敷地等も地方の如く廣くない、又運動場も不足して居たり或は光線の射入が不十分であつたり、或は土地が濕地であるとか、種々な關係がある、一寸外見上の建築は、體裁が宜いやうであるけれども、內部に立入つて見ると、地方の小學校よりは窮屈になつて居ると云ふ處もある、是れは實際已むを得ない次第ではあるけれども、今言ふやうな所からして、一度流行性眼炎が、都會の小學校に跋扈すると、どうしても害を被る所の兒童が多いのである、都會の小學校は今話した如く田舍の小學校のやうに、十分なる土地を占めて設計することは出來ぬ窮屈極まる故であるか慢性**トラホーム**は、都會の小學校に隨分汎く行渡つて居るやうであるけれども、全校悉く急性の眼炎に襲はれて、一時休校までせねばならぬと云ふ程に、慘狀を呈したと云ふ事を聞かぬだけ結構なことである、併し是れ迄さう云ふ事がないから、將來も大丈夫であると云うて油斷したならば、何時何日此の疾患に襲擊されて、父兄も敎育家も困ると云ふ時か、來ぬとも限らぬから、尙此の上とも、十分なる注意を拂ふことが必要であらう。先年宇都宮市の小學校に此の疾病が蔓延して隨分慘酷な有樣を呈したと云ふ事が、當時の新聞にも出て居つた、又其の學校も非常に困つて一時休學を

命じ、特に校内に診察所を設けて、之が撲滅策を謀つたと云ふことも事實である、其れから尙其の前に府下の靑梅の小學校に此の病氣が一時蔓延したことがある、其の時には東京府廳からも吏員を派出し、或は警視廳からも、即ち現今の代議士、其の當時警察督長であつた山根醫學士などが、其の學校に臨檢されたと云ふ、其時私にも府より諮問されだこともあつた。靑梅町及び學校の位置等はどんなものであるか、私は實際を見ぬから知らないけれども、想ふに宇都宮あたりに比較したならば、町も小さからうし隨つて人も寡いであらう、さうして又學校等も比較的空氣が良く、其の周圍も廣く取つてあるだらうと思はれるが、一時此の疾患が跋扈したことがある、宇都宮市も我々が日光遊覽の時に通り拔けた外、實際町の隅から隅迄見た譯ではないが、恐く靑梅町邊から見れば、人家も稠密して居るだらうし、又學校規模も比較的大きいであらうと思はれる、それでさへ、急性の眼炎が流行して慘酷な狀態を呈したと云ふ譯であるから、決して村落であるからどうの、都會であるからどうのと言うて、油斷すべからざるものである。殊に我が東都の如き人家稠密の大都市、其の外大阪とか、神戸とか、横濱とか云ふやうな、人家稠密なる處の學校などに於ては、大に鑑みねばならぬと思ふ。

五　流行性眼炎と外國渡航者

其れから私が明治三十六年頃に、外國渡航者の眼に就て健康診斷を委托されたことがある、それは米國領布哇に渡航する所の者で多くは勞働者であるが、其の渡航者の眼質の檢査を、三十六以上の移民會社の同盟會から委托されたのである、尙ほ其の外に米國の汽船會社の出張町が横濱の四番館に在る、是れは米國本土に渡航する所の者を扱ふ汽船會社である、其の方からも、自由渡航者の眼質の檢査を委托されたのである。それで每週一回宛横濱に出張して其の渡航者の眼質を檢査したが、其の年の二三月頃かと思ふ。木の芽は出るし、花は綻び、春風駘蕩、實に一年の内一番人生の快樂を貪る時候であつた、其の時に汽車中から眼が赤くなつたと云ふ者が一二人あつた、出帆日を當てに全國から三々五々連れ立つて、皆横濱に落合ふのだから、一時に何百人と集る、其の當時は一船五百人と云ふ制限になつて居たが、自由渡航者を加へたならば、横濱に集つて來る者は、何千人と加ふ數である、其の地方から出て來た者の中に、一二人眼病に罹つた者があつた、其れが爲に此の眼病が彼等の社會に跋扈して、一夜の内に三十人四十人襲はれたのを、私は經驗したのである。で、初め檢査を受けた時には、別段異狀が無いと云ふので合格した、其れから消毒所を經て船中に入つて、今度船の醫師が其の健康狀態を檢査する時になつて、一時に數十人の者が赤い目をして居る爲に、折角乘船したのを上陸させたと云ふ事もある。或は又横濱に於ける檢査にも合格し、其れから船の檢査にも無事に通つ

て、其の後船の航行中に、此の眼病が發生して上陸地に達した時に、其の上陸地の檢査に於て、四五十人も不合格になつたと云ふ事も目擊して居る、甚しきは一船で八十人、多い時には百二十人も上陸地から、横濱に送還されたことを實驗したのである、かう云ふやうに、船中の如き極く小區域の處に群集して居る者に、此の眼病が發生した時には、より烈しく傳染するものであると云ふことを、私は三十六年に於て確に實驗したのである。

六　傳染の徑路と其狀態

で、其の傳染の模樣を見ると、一室に一緒に寢たとか、或は一棟の中に居つたとか云ふ者は、此の禍を被り、他の棟に居たとか、或は一室に一緒に寢起きしなかつたとか云ふものは、此の禍を免れて居る、唯一室の中に寢起を共にしたものは、一夜位の內に、忽ち此の禍に罹つて居る、其れは實に不思議のやうである。朝迄は眼も白くて當り前であつたものが、もう夕方から知らない內に彼方も赤くなつた、此方でも赤くなつたと云ふやうな有樣であつた。で、此の病毒の潛伏期は、實に僅かなもので殆ど十時間か十二時間位な潛伏期で以てどん〳〵他へ傳染して行く、其の傳染の工合を見ると、どうも空氣傳染でもあらうかと思はれるけれども、併し船のやうな狹い一室に立籠つて、波浪でも荒かつた時に、船窓を閉ぢて空氣が交代しなかつたとか、或は學校等に於て、空氣の交換の不十分な一教室を閉めて、其處に生徒を收容して置いたとか、或は宿屋の如き、即ち多人數を一室に寢せたとか云ふやうな場合に、此の病毒が傳搬するのは、何時も其の揆が一つである所を見れば、全く空氣傳染と云ふ譯でもないであらう。或は學校とか、或は船とか或は宿屋とか云ふやうな處で、一室を立閉めて多人數が起居する爲に、塵埃か立つ其の病菌の附着したる塵埃が、自然空氣中を浮游して甲乙丙と云ふ者の眼に觸れて、此の病毒を感染するものであると云ふ事は確である。學校に於ける流行でも前に話した學校の實際は見ないけれども、恐く初めは同じ教室に居る者に傳染して、それから運動遊戲の場合に甲の級、乙の組の者と混同する際に、漸次傳染して遂に全校悉く襲はれたものであらうと思はれる、と云ふのは前に話した如く、外國渡航者の中で一室に起居を共にした者は、此の禍に罹り處を違へて一緒に居ない者は、此の禍を遁れて居る、或は船の航行中、船中に於て此の病毒に襲はれ、不幸にして上陸地から送還せられたと云ふ確なる實驗から考へて見れば、他も其の通りであると推定することが出來ると思ふ、其故に此の病氣の流行中は、人の群集する處は餘程注意を拂ふ必要がある。

七　流行性眼炎と外國

又外國に於ても隨分悲慘な歴史がある、百年以前は歐洲諸國に於て、殖民の渡航を頻に奬勵したものである。今も同樣だが就中佛國奴隷船の如きは、一船何千人と云ふ渡航者が乘つて居つた、其の中には、亞弗利加の黑人も居つたといふことであるが、其の際などは船内に、此の病氣が傳染して殆ど船の運轉に不便を感じて、定期の時日に達することが出來なかつたこともあるし、又甚しきは、船内に盲目者が澤山出來た爲に、遂に船の進行を中止したと云ふ、慘酷な歴史もある。其れから白耳義の軍隊、即ち兵營内に、此の病毒が傳播した時には、一時に何千と云ふ盲目者を出して、始末に行かぬと云ふので、態々獨逸から醫師を招聘して其の意見を聽き、種々な策を講じて見たけれども、其の効を奏しなかつたと云ふ事もある。それから曾て獨逸國ハンブルグ港に於ても、一種の流行性眼炎が跋扈して、港市の良民を苦めた慘酷なる報告を見たこともある。が、此の傳染毒は肺炎菌の樣な重球菌が居つたとのことである。で、唯一校内の小學兒童とか、或は一船内の移民とか云ふ位の害であるならば、或は之を見遁すことも出來るかも知らんけれども、戰時に於て一朝斯る眼病が跋扈して、何萬何十萬と云ふ軍隊に傳播した時には、實に取返しの付かぬ所の國辱を招かなければならぬ次第に立至るのである。であるから戰時に於ては無論のこと、平時に於ても國民たる者は、斯る病氣の豫防注意と云ふことを、常に頭に忘却せぬやうに考へて居らなければ、實に由々敷き一大事に至るであらうと思ふ。

八　流行性眼炎の防止

其れで、此の病氣の傳播する有樣は、前にも述べた通りであるが、然らば此の病氣は、如何にして之を防ぐことが出來るか、又不幸にして一旦病毒の襲擊を受けたならば、如何なる處置を執つたら恢復するであらうか、斯う云ふお考が諸君の頭に浮ぶだらうと思ふが此の病氣は、昔から我が内地にもあつたが、昔は今日の如く交通機關が發達して居なかつたから、若し流行しても其の害を一局地限りで防止することが出來たのであるが、陸に汽車あり海に汽船ありと云ふ今日の如き交通機關の發達した際に於ては、之を一時に防ぐと云ふことは、仲々困難な次第である。併し各個人に於て、常に注意を怠らずに居れば、大事に至らざる中に防止する事が出來ると、私は斷言して憚らぬのである。

九　流行性眼炎の豫防

元來此の病毒が傳染するのは、不潔なる夜具とか、或は塵埃の起る工場だとか、或は注意の行屆かぬ學校の運動場に於て、多數の兒童が俱に遊戯を爲す場合とか、或は教室の空氣の交換不十分な處で

數多の兒童を教授する際とか、先づさう云ふやうな所から、此の病毒が擴ると云ふ事であつたならば個人としてさう云ふ原因から遠かるやうにし、監督者としては、遠ることに常に力めて居れば、之を公衆に傳へる途は、杜絶することが出來る。又個人衛生としては塵埃の起たぬやうに掃除を注意するとか、或は此の病氣に罹つた者と長く同居せぬやうに注意するとか、或は患者の使つた手拭、洗面器等を使用せぬやうに注意をして居つたならば、之を豫防することが出來るのである。

一〇　流行性眼炎の豫防注意

其れから不幸にして一朝此の病氣に侵されたものは、どうすれば宜いかと言へば、先づ第一に是れは重に病氣であると云ふ觀念を、始終頭に持つて居らなければいけない、なに是れは流行目で輕症なものだと云ふ考へを持つと、自然治療も怠り勝ちになるから、遂に慢性となつて一生眼疾で終るやうになる。それで此の病氣に罹つた者は、不潔な風呂場の水で、顏を洗ふやうな事は避けて、淸潔な汲立ての冷水を以て、眼を洗ふとか、冷すと云ふやうにして、濫に坊間に在る所の眼藥を使用せぬやうにしなければいけない、專門の醫師に就いて治療せずに、無闇に刺戟する眼藥を濫用すると、遂には慢性の眼疾に轉化して仕舞つて、一生の禍となることがある、即ち頓日横濱、神戸、長崎あたりの檢疫で不合格となるものはどうかと云ふと、多くは此の流行性眼炎に罹つたのが慢性に轉化して、眼內結膜糜爛とか、慢性の輕い充血の殘つた者が不合格になると云ふことを實見するのである。別段惡性のトラホームと云ふ譯では無いが、此の流行性眼炎に罹つて適當な治療を加へぬ者が、檢疫所に於て不合格となる、さう云ふものが十中の五六を占めて居るやうである。此れに由つて觀るも、此の病氣に罹つたならば、十分なる治療を加へるの必要がお分りだらうと思ふ。若し姑息の治療に止めて置くと、文明國に渡航しやうと云ふやうな場合、大に失望落膽せねばならぬことになる。

玆に注意して置きたいのは、日本に於ては流行性眼炎が、三年目とか五年目とかに大流行し、又前に述べた如く毎年春とか秋とか實に人生の快樂を感ずる好時節に、小流行を爲すやうである、其の流行の結果は、渡航者其他實業等を始める人の失望を胚胎する譯であるから、我同胞は流行性眼炎に就いて注意を拂ふことを忘れてはならぬ。

一一　賣藥の危險

昔から世間に知れ渡つて居る精錡水抔を始めとして、近來は恰も雨後に於ける筍の如く、續々眼藥が出來て來たのである。で、醫師の診察も受けずに、只一瓶の眼藥で如何なる眼病も全治するやうな

廣告でもあると衛生思想に乏しい我が同胞中には、之に惑されて淺慕にも之を無闇に點眼しさへすれば癒るものと考へて、徒に濫用する結果癒ゆべきものも、癒らずに慢性になると云ふ不幸を招くものゝあるやうだ中には結膜まで黑染めとして黑玉と見境も付かぬ樣な病人も來るのである。此等は目藥の亂用であると云はねばならぬ。衛生を重んずる人々は能く能く注意せねばならぬ事である、殊に近頃は何博士何々のアドラとか書いたものが、到る處の電柱や、家の角などに貼付けてあるが、成程博士發見のアドラと云ふことが、公に書いてある所を見れば、アドレナリンか何かの製劑かも知れん、アドレナリンは、流行性眼炎や其の他の黴菌を、撲滅せしむる消毒作用は、決して持つて居ない、唯血管を收縮せしむる力は、確に之を認めることが出來る、我々も眼の手術の際に、止血の目的を以て使用することがあるが、此の藥を點眼すれば、著しく貧血狀態を來す、其の目的には効を奏することは實驗して居る、併し藥の効用も知らない素人が、之を濫用するに至つては、寧ろ不測の禍患を招致しはせぬか、之を眼藥として色々の眼病などに使用して卓効があるとは、私は決して認めぬのである角膜即ち黑球の如き血管の無い膜、血管の乏しい膜に之を連用したならば、營養障害を起して、却つて他の眼疾を誘致するやうな虞がありはしないかと、我々は大に氣遣うて居るのである、此等は何でもないやうであるけれども、苟も我々が公衆衛生として、個人衛生として、社會に衛生力を普及せんとするに方つては、かゝる坊間の賣藥と雖も、之は輕視することは出來ぬので、大に其の効用等の事も社會に紹介する必要があると思うて、序ながら爰に注意旁々陳べ置く次第である。

一二　痲毒性眼炎

第二、ブレノレー即ち痲毒性眼炎は、俗に瘋眼と云ひ、前の流行性眼炎に比較すれば、極めて少數である、併し、又猛惡なる急性の眼炎であるから、少しく治療手當を油斷すると、僅か一二週間の內に角膜を潰爛して失明することになる。彼の按摩とか、或はよく緣日あたりで見掛ける所の路傍で三味線を彈いて人に哀みを請ふて居るやうな失明者などは、大抵此の痲毒性眼炎の重症に陷つた爲、盲目となつた者であらう、又盲啞院あたりの生徒に就いて統計を取つて見たならば、盲目の原因は恐く此の痲毒性眼炎から來たものが、多數であらうと想像されるのである。孰れの國の盲目者の統計を見ても、痲毒性眼炎から來た所の盲目と**トラホーム**から來た盲目者が、首位を占めて居る。彼の有名なる眼科醫コーン氏の盲人千人に就いての比例を見るに、初生兒の痲毒眼より來るもの百十一人、大人の痲毒眼二十六人である。其の他の各國の統計等も分つて居るけれども、茲に統計上の事を申述べて諸君の倦厭を買ふのも本意でないから、趣味の少い統計的の事は、今は省略して申上げぬことゝする

が、兎も角も盲目者の多數は麻毒性眼炎から來て居ると云ふ事は、確かである。で、此の病氣の原因は、ナイセル氏淋病菌と云ふものゝ爲にて、大人と初生兒に分けて申すと分り良いだらうと思ふから、二つに區別をして申上げることにしやう。

一三　大人の痲毒性眼炎

第一に大人の方から申すが、大人のブレノレーと云ふのは、即ち彼の花柳社會等に頻繁に出入して痲毒に罹つた人に多い、其れは痲病に罹つて居る爲に褥中などで知らざる內に其の膿が手に觸れたり着物に附着したりして、其れから眼內に入つて、痲毒性眼炎となる、故に痲病を患ひて居る者は、殊に注意を要するのである。極く少數ではあるが、尿道に淋毒あるものが、眼の深部又は肘、膝關節內に痲毒性の病氣を來すことがある。此等は血管水脈管等を經て遠方の器官を攻めるのに外ならぬと考へる。又痲病も煩つて居なくて、此の病氣に罹る者があるのは、前に話した如く他人の病毒に感染したものである、印ち家族の內の一患者から感染することは勿論、數多の他人、或は浴場、電車內、活動寫眞等他人數雜沓の場所などゝ云ふやうな所から、自然に此の病氣に感染した經路は、確かである而して此の病氣は早く治療しさへすれば、其の成績は非常に良好であるけれども、少しにても手遲れになると最初は黑球に星が出來て、遂に其れが腐つて仕舞つて眼球が飛出し、さうして盲目と云ふ不幸に陷るのである、であるから、眼に赤味を帶びたやうな場合には、早く專門家に治療を請ふことが必要である。

一四　手遲の實例

私共の永年間の經驗に依つて見ると、所謂死際の神頼みと云つたやうな譯で、重症になつてから駄ぎ出し、我々の門を叩くと云ふやうな人が多いやうであるが、是は大なる考へ違ひで、總て病氣と云ふものは輕症の時に手當をすれば、必ず効のあるものであるから、何でも宜いから早く醫師の治療を受けると云ふ考を持つて居らねばならぬ。で、先づ痲病のものは、便所に行く度每に、必ず石鹼等を以て手を洗ふ位に注意せぬと危險である、之に就いて一つ實例をお話しするが、東北の或る青年が痲病を患つて居つた、けれども之を親に告げるのを遠慮して居つた爲に、遂に眼に移轉して苦悶に禁へず、近村の醫師に就き手當をした。併し追々見えなく成つたから、親が心配して私の處に伴れて來たことがある、其の時には既に失明して居つた段々其の病歷を聞いて見た所が、實に氣の毒な話である、何分村落の事であるから、種々の迷信が行はれて居る、其本人が永く尿道炎に罹つて苦んで居つた所

が、人の小便を以て顔面を洗ふと、痳病が速に癒るから、さうせいと言つた、そこで本人は尿道炎の苦し紛れに排尿を以て顔を洗つた、所が其の翌日から眼が赤くなつて來て、啻に尿道炎が癒らないばかりでなく、今度は眼の方が惡くなつた、遂に兩眼とも潰れて仕舞つた、尤も潰れる前に種々手を盡したけれども、地方のことで何處の醫師に診て貰つても皆癒らぬと言はれるから、態々出京して診斷を請ふ譯であると言つて、其の親が涙ながらに物語つた、かう云ふ實例がある。悲しい哉、未だ邊鄙な村落に至ると、かゝる迷信家もあるが、都會の人士に於ては如何に衞生的思想が缺乏して居ると言つても、よもや其んな詰らぬ事に迷ふこともないであらうが、尙念の爲にお話しいたして置く。

一五　今日の社會と花柳病

近來は醫學の全體が進歩して居るが、就中眼科の如きは、長足の進歩をして居る科目であるから、今日はかゝる病氣は手當さへ早ければ必ず全治するのである。一體醫術の開けて居る今日では、痳病から來る盲目者は跡を絶たねばならぬ筈であるのに、世に痳毒の爲に盲目になる者が澤山在るのは、花柳病が社會に跋扈して居る結果であるので、其れ丈、其の病毒が社會一般に擴つて居ると看て宜からうと思ふ、昔は醫學の進歩が鈍かつた爲に、治療が屆かずに盲目になつたけれども、併し又社會に此の病氣を患へるものも尠かつたのであるが、今日では醫學の進歩と同時に、此の病毒を傳播せしむる機會が多いので、此の病毒から來る盲目者が、統計上增すと雖も、決して減少して居ない。で、かゝる花柳病跋扈の際に在つては、特に衞生の普及を奬勵するのが、社會道德として、最も必要な事だらうと思ふのである。

一六　初生兒の痳毒性眼炎

其れから初生兒の淋毒性眼炎とは、生れて大抵四日目乃至極く遲くて一週目位から、眼瞼が腫れ上つて、さうして眼が塞がつて了ふ、其れが兩眼一時に來るのもあるし、又先に一眼だけ罹つて二三日の內に他眼に傳染して、遂には兩眼同じことになるのもある、勿論病毒の多少に依る譯ですが、初から重く來るのと輕く來るのとある、假ひ初め輕く來ても、漸次重症の容體を呈して來るので、初は眼瞼が腫れるのであるが、終には尿道から出る痳病の膿と、同じ濃厚なる濃汁が出て來る、此の濃厚なる膿を取つて、顯微鏡で檢査すると、此の中に痳毒の微菌が澤山這入つて居る、詰り此の微菌が種々な物に附着して、多數の人に傳染するのである。

一七　恐るべき實例

此の初生兒の眼炎に就いて、私の實見談を申上げると、是れは市内の山の手に住んで居られる人ですけれども、可愛い孫が此の病氣に罹つた爲に、お婆さんが此の眼の中に溜つて居る膿を吸出してやれば早く癒ると云ふことを人から聞いて、自身はどうなつてもよい、どうか可愛い孫の眼を早く癒してやりたい、盲目にはしたくないと云ふて眞實の愛情から膿を吸出してやつたのである、所が其の後、其のお婆さんに病毒が傳染して孫と同じ痳毒性の結膜炎に罹つた、そして孫の方は生氣も十分であるし、又眼科專門の治療を受けて恢復をしたけれども、其のお婆さんの方は、憐れにも黑球が腐つて遂に盲目になつて、了つたと云ふことである。是れは矢張私が實見したのであるが、此の如く恐しいものであるから、先づ子供が生れて四日目頃から眼が赤くなつて、腫れて來た場合には、坊間に有り觸れた眼藥などを點眼したり、又は加持祈禱で癒さうと云ふやうな迷信を起さずに、早く專門家の治療を受けると云ふことが肝要である。

一八　其の治療上の心得

前に申した如く、昔は治療をしても失明した例が多いのであるけれども、醫學の進歩した今日では早く治療さへすれば一二週間で全治するのである、實際治療上極めて成績の良いのは、我々の處に早く來た者で百中百治すると斷言しても宜い程である、所が未だ四日目や五日目の生れたての子供であるから、母親の手から離すのは可愛想だ、母親は未だ産褥に居るので、診察を受けるのは手臆却であると云ふやうな、淺墓な考へよりして治療を怠る、其の内に黑球が破れる爲に、子供が乳汁も呑まず寢もしないで終夜泣き明す、そこで始めて已むを得ず、眼科醫の門を叩く、其の眼科醫の門を叩く時には、もう黑球が破れて居るのだから、如何とも仕方がない、からと云うやうな例が多くあるが、是等は大に不心得である、昔とは違つて今日では、必ずしも産婦が乳兒を携へて、醫師の門を叩かねばならぬと云ふ必要はない、都會には安い所の牛乳、其の他の人工營養物もあるから、さう云ふ物に代へてでも早く專門家の治療を受けることが出來るのである。故に親の不心得より愛兒をして、一生不具に終らしめるやうな不幸を招かぬやうに注意しなければならぬ。

一九　初生兒感染の經路と母

元來此の初生兒の痳毒性眼炎とはどうかと云ふと。多くは最初男子が痳病を煩つて之を婦人に傳へる、其の傳へられた婦人が妊娠をする、そして初生兒が産道を通過する際に、感染して起るものである、其故に不幸にして妊婦が病毒に罹つたならば、出産の時、特に産婆に注意するが宜しい。成る程

産婆の技術を以て之を見顯すのも必要であるけれども、併し又産婆と雖も餘り深くかゝる事迄立入ることを控へる場合もあるであらうから、産婦の方から遠慮なく、かう云ふ病氣を煩つたから注意するやうにと云ふ事を話して置くやうにしたならば、産婆の方に於ても其の心して分娩の前に、産道を洗滌し置くやうな事もするのであらうから、初生兒の膿漏眼を豫防する助けともなるだらうと思はれる。

二〇　産婆の點眼は禁じたし

それから近來の産婆中には、産婦又は初生兒か病毒に感染して居るや否やが、不確定であるのに動もすればクレデー氏の法に依つて豫防的に硝酸銀水を點眼することが行はれて居るが、是は大きに考へ物である。既に分娩前に淋毒黴菌でも認めて、確に歴々たる症狀でもあるならば、豫防法として輕い刺戟藥を産兒に點眼する丈は強ち咎めぬけれども、猥にかゝる強力なる刺戟藥を點眼することは、大に注意せねばならぬ、無闇に初生兒に點眼をして、却つて人工的に刺戟性の眼炎を起さしめて、兩親に心配を掛けると云ふ例が世には多いのである、我々も度々さう云ふ者を診察したが、是れは大に考ふべき事である。又假令クレーデ氏法に從ひ健康の兒童に五十倍の銀水を點眼するは角膜を腐蝕する恐れあり、百倍の稀薄にては効がない、然らば只徒に産兒を苦むのみに止まるのである、又私の經驗では點眼したる乳兒に膿漏眼を發生したる病兒を診察せしことあり、故に其れよりも、寧ろ産婆と云ふものは、若し産兒の眼に異狀でもあつたら、早く專門家に診斷をさせるやうに、其の父母に注意する位な所で十分だらう、何となれば前申した如く、早く專門家の門さへ叩けば、決して成績の惡いものではなく、必ず一二週間に全治するから、單に其の父母に注意する位な所で、産婆の義務は十分であらうと思はれるのに、近來は或る産婆の如きは、自家調合の眼藥迄與へる惡風があるから、苟しくも衛生を重んずる紳士淑女は、注意が肝要である。無駄な樣であるけれども、序ながら此の事を茲に附加へて申して置くのである。（なほ此病氣の詳細の説明は第十七章に讓る）

二一　實扶垤里亞性眼炎

第三、實扶垤里亞眼炎は、前申した眼病から見ると、少いやうである、併し北獨逸の或町村に於て流行したと云ふヤコブソン氏の報告があるけれども、私共が今日迄に診察した患者の數は、無慮數萬人以上になるが、其の中に於て實扶垤里亞性眼炎の患者を診斷したのは、僅に十人か廿人位のものである。して見れば前述べた眼病よりは、餘程少いものであらうと思はれる。で、咽喉に來た實布垤里亞は、八種傳染病の一つであるから、社會も非常に喧しく言ふ、其れは無論傳染病豫防法に依つて處

置することになつて居る。さうして近來は、血精療法が開けた爲に、咽喉に來た實布垤里亞と雖も、時期さへ早ければ大變に成績が良いので、殆ど死亡者を出さぬで濟む位までになつて居る。血精は先年來東京市あたりに於ては、各區役所に備へつけて置いて請求者に與へることになつて居る、我が麴町區に於ても前の古本區長の時に開業醫に逼く通知されたのであるが、現在の區長に於ては、斯る注意を與へたか聞かぬ、我が東京市内に在つて、此の疾病を患へる者は、實に幸福な譯である、是れ畢竟明治時代の賜ものと、我々は深く感謝する次第である。然るに其の趣意が逼く行渡つて居る筈であるのに、往々時期を遲延した爲に、不幸の死を招いたと云ふ事を屢々耳にするのである。其れ故に序ながら、此の事も社會に紹介して置くのである。

二二　咽喉に來るものゝ來ないもの

偖今申したやうに、咽喉に來た實布垤里亞に付いては、八種傳染病の一種として社會も八釜しく言ひ、隨つて之を重大に取扱つて居るが、眼に來た實布垤里亞に就いては、どう云ふものか社會が其れ程に注意を拂はぬやうに思はれる。是れは大に考へ違ひである、リユフレル氏實布垤里亞の黴菌は、決して咽喉のみを占領すると限つて居ない、眼内の結膜に入つて實布垤里亞性の眼炎を起すことは、眼科醫の我々に於てすら見受けるのであるから、世の眼科醫の大家に於ては、隨分澤山の實驗があるだらうと想像されるのである。で、之が最初咽喉に來て、然る後に眼に來たと云ふものならば、其れは容易く鑑定も出來るし、又血精注射さへすれば、全身に在る病毒は、皆消滅して了つて其の血精注射が大に効を奏するから宜いけれども、往々咽喉を侵さずして、眼に初發することもある、眼に來た實布垤里亞は勿論、其の局部症狀の外に、全身の發熱はあるけれども、其の症狀が咽喉に來たやうに呼吸困難とか其の他の全身症狀も少いから、兎角世人も重きを置かぬやうになり易いけれども、併しながら眼に來た實布垤里亞と雖も、油斷すると、遂には全身に擴つて、眼局部の危險は無論のこと、生命に關すると云ふ危險もあるから、決して之を輕視せずに、多大なる注意を拂はなくてはならぬ。又世の眼科醫たるものは、無論實布垤里亞性眼炎も他人に傳播する虞があるから、かゝる患者に接した際には公德上一般實布垤里亞と同一の豫防注意をする考へを持たしめねばならぬと思ふ。隨分咽喉に來たものに就いては、其の取締が嚴重であるが、他の一局部に來たものに就いては、未だ何等の制裁が無いのを幸として、之を輕々に看過し流行傳染せしむるやうな例が、世にはないとも言ひ難いから、特に茲に注意を促す爲に陳べ置く次第である。

二三　ペストと眼病

第四、其れからもう一つは、ペストが又眼から來る。元來ペストには腺ペスト、肺ペスト、皮膚ペスト、腸ペストなど種々あつて、是れはエルザン氏菌と云ふ微生物が在つて、諸器官から侵入する傳染病である。其れは結核と云ふと、肺に來るのが多いから、肺結核と言ふて社會が之を恐れるのであるが、結核黴菌と云ふものは、啻に肺を侵すのみでない、全身の諸器官を侵すのである。詰り結核黴菌のみならず、總ての黴菌は、粘膜や結膜、或は皮膚の健全でない部分から、體内に侵入する或は淋巴道を經、或は血管に入つて、血液に隨つて全身を周遊するものである、固より黴菌といふものは、高等の器官を備へて居る動物でない、極く下級の植物に屬するから、自分が人體の器管を擇んで侵入する力は無いであらうが、併し唯人身を襲撃するに機敏であるから、肉眼で見ることの出來ぬやうな粘膜や皮膚の缺損部から侵入して、さうして血の流に隨つて全身を周游するものである。例へば蟻や蜘蛛を小川に放つて見ても分るが、流れの急な川幅の狹い處は、彼等も容易に岸の芝草などにとり付くことは出來ぬけれども、下流に至つて、流れは緩やかになり川幅も廣くなると、彼等も漸く岸に寄付き得て始めて根據地を得ると云ふやうなもので、基する所全身の器官中活動の鈍い場所は黴菌の寄宿舍である。黴菌にしても初めは皮膚や粘膜、呼吸器、眼結膜等種々な處から肉體に侵入するが、一朝血液に侵入した曉には、血流に隨つて全身を周游する。さうして血行の緩慢なる器官、或は最小の毛細組織等に至つて、比較的活動の鈍い處に、其の巣窟を造るのであらうと思はれる。其れで結核黴菌は呼吸の際入つて來て、肺尖に止るペスト皮膚から入つて腺に止まると云ふやうな。いろ〳〵諸病毒の得意作用もあらうけれども、又一般の原則に從つて左右されるから、必ず結核は肺のみである、實布垤里亞は咽喉のみである、ペストは腺のみであると早合點して居ると、大に誤ることがある。

二四　結核と眼病

世の人は結核と云ふと肺病のみを非常に恐れる。成る程結核の如きは、呼吸器に來るのが多いと云ふことは確かであるが、尚呼吸器の粘膜から血中に這入たり、或は淋巴管腺を經て遠隔の器官に這入つたものが眼に來たり、或は肋膜に來たりすることがある、或は飲料液の媒介に依つて腸に來たのもあるのであらう、子供の如きは、能く犯され易いのである、或は塵埃と共に這入つて呼吸器に沈着したのもあるであらう、尚血の流に隨つて到る處の組織を侵して居る例もある、殊に肺を先に患へて の部分に來たものもあらうけれども、又肺は健康であつて、眼底の脈絡膜を侵して來たことは、イエ

ーグル氏も報告して居るが、眼に初發した例もある、或は眼の結膜などに結核黴菌を見ることは屢々である。結膜などは無論のこと、涙嚢などに這入つたのは、無論外部から這入つたと言はれるけれども、眼底に這入つたのは眼の膜を通つて眼底に來たのであるか、又は全身の血流を經て、眼底に來たのであるかは、隨分疑はしい問題である、我々の考へで見ると、一應血管に這入つたものが、血流に隨つて全身を周游する際に局部に沈着したのであらうと思はれる。是れは間々經驗する所である、獨り結核性黴菌に限らず總ての黴菌と雖も、さう云ふ軌道を通らんとも思はれるのである。

二五　ペスト傳染の門

眼ペストなどが眼の結膜から侵入したのは、多分直接に眼に轉輾して來たのであらうけれども、併しペストの如きは隨分其の侵入の途が多方面である、即ち飲食物から這入つて消化器を侵すのもあれば、或は空氣から傳はつて、遂に肺の組織を侵す肺ペストもあり、又皮膚を侵す皮膚ペストもあるし或は腺に來る腺ペストあると云ふやうな譯で、實に肉體に侵入する方面が廣いのである、殊に眼の如き鋭敏なる組織を侵して、其れから身體に侵入する例も多いだらうと思はれる。中には眼の組織を侵して眼だけに止まつて居る病氣もあるけれども、又初めは眼内に侵入して後、全身の諸器官を侵して遂に生命を奪ふやうな例も多くある。現に我々の同業者の中にも、先年ペスト流行地に行つて眼ペストに侵され、其の結果遂に致命したと云ふ悲慘なる例證もある我々は今以て同情に堪へぬのである。

二六　眼と全身の關係

で、眼病は生命に危險はないと云ふやうな、淺慕なる考へを持つて居る譯には行かない、眼と雖も全身に連續せる主要器官であるから、眼病の病毒が全身に蔓延して、遂に生命迄奪ふ事は、病理上から言つてもあり得べきことで、又實際に於てさう云ふ眼病は澤山あるので、一般傳染病と唱へるものが肉體に這入るのに、隨分其の徑路を眼の結膜あたりから取ることがないとは言へぬのである、即ち黴毒の如きであらうが結核の如きであらうが、實布拉里亞の如きであらうが、ペストの如きであらうが、初め黴菌が眼の結膜から侵入して、全身に蔓延することがあるから、大に注意を拂つて居らねばならぬと思ふ。尤も眼の如き機敏なる機關は、少しにても其の機能を害した時には、他の内臓とは違ひ患者自身が、早く其の視力の障碍を覺えて、眼科醫の門を叩くやうな次第である。

二七　眼科醫と全身の着眼

又眼科醫も其の眼病を診斷して、他の臓器に病毒の伏在して居ると云ふ事を看破する例は、世に多

いのであるが、元來眼科醫たる者は恰も政治家が世界の大勢に注目するが如く、廣く眼界を開いて全身の機關に着眼する必要が大にある、近來局部專攻と云ふことと、追々專門に分れて來て居るけれども、常に人身の大體に着眼せずに、單に專門の局部の療治にのみ着目すると大なる間違が起りはせぬか、須く醫學全體に着眼を拂つて、そうして天の軌道を脱せず、自然良能の尊ぶべきを知り、そして後に專門の技術を揮ふと云ふことでないといかぬだらう。是も後進者の爲め一寸附け加へて置くのである。此の他梅毒性、レプラ性、痘瘡、痲疹、インフルエンザ、ワイルス氏病、狼瘡、マラリヤ等まだ二三の傳染性の眼病があるけれども、餘りに長くなるから、此章は是れで止めて置く。

第一七章　淋毒性膿漏眼（俗稱ふう眼）の症狀と其豫防治療法

一　淋毒性膿漏眼豫防の必要

社會に慘毒を流し國家的經濟を紊亂することの甚しいものは、此の淋毒性膿漏眼に如くものはなからうと思ふ。國家社會より觀れば其の不生産的であることは言ふまでもないことであるが、個人よりして、患者其者に就いて見るならば、其の悽愴悲慘の狀は幾何の程度であるか、一家の經濟困難の如きは家族の當然負擔すべき義務として、論ずる迄もなく痛苦を感ずることは多かるまいか、其の平和洋々たる家庭の和樂を破り、陰々鬱々濕り勝ちとなるならば、一家の衰頽は勿論のこと意思消沈進取の氣力を失ひ、常に引込み思案に傾くならば、國家を組成する分子として、最早多きを望むことは出來ないのである。若しも此の如き分子にして其の數を增し、漸く多きを加ふるならば、國家の元氣に影響して、士氣を沮喪することは、なかるまいか甚だ寒心に堪へないことである。されば此の疾病より來る盲目を未發に防ぎ得たときには、其の結果は反對の現象を來して、個人としては勇壯快活、一家としては健全なる家庭を作り、和氣洋々、國家としては國を富ませ、兵を強うし、殖産は日に進み工業は勃興し、列國の間に處して優に頭角を現すことが出來るであらう。それであるからして此の疾病の豫防策を講じ、一度發病した時に處する方法を企つるのは、衛生を重んずる者の當然研究すべき重要なる事であらうと思ふ。

二　國の文野と淋毒性膿漏眼

淋毒性膿漏眼の猖獗にして、我眼科界を蹂躙することは、眼病**トラホーム**と兄たり難く、弟たり難しと云ふやうで、時に或は**トラホーム**に一歩を擢んでゝ居ることがないでもない、衛生の注意を怠らなかつたならば、此の猛惡なる眼疾も、光明なる快復を求むることが出來るのであるが、一朝之を等

関に附する時には、不幸遂に両眼明を失して、殆ど廃物と同様なる惨境に沈淪するのである。此の疾病はトラホームと共に野蠻國に、其の多數を占めて居る。衛生の完備した文明國には、跡絶することが出來ないと云ふ事は甚だ覩易い道理である夫れ故に文明國の人は、此の疾病の多少を聞いて、國の文野をトするの標準として居ると云ふことである。此の如くなれば此の病は國家の經濟を攪亂するのみならずして、國家の體面に關する事が少くないではないか。

三　淋毒性膿漏眼の統計

私は是より斯の病の如何に多數を占めて居るかと云ふ事を、統計的にお話を致さうと思ふが何分他の統計を調査するの時機を得ないから、或は不完全であるかも知れぬが、我が東京眼科病院に於ける統計の概略をお話する、視力朧朦として漸く咫尺を辨し得るもの、及び全く明を失した方で、當院に來りて診察を需められたのが、總計三百八十三人である。此種の患者に就いて其の原因を取調べたが、今私のお話する淋毒性膿漏眼に基因するものが、三十九人であつた。之を百分數に換算すれば、百人に對し十人二分餘である。此の統計に依りて見るときは、如何に病毒の猛惡であるかと云ふことが、推して知るべきである。以上は只私だけの統計であるが、全國四萬以上の醫師と諸公私病院の統計を集めて見たならば、豫想以上の大數で驚くべき程であらうと思ふ、各國に於ける盲人表を見るに、獨逸民賢大學の表は初生兒淋膿眼は第一位でトラホームは第二位を占めて居る。獨逸ブレスロー大學のコーン氏の表に依れば、盲人千人に就き初生兒の淋膿眼百十一人、大人の淋膿眼二十六人、トラホーム十七人である。ステファン氏の表に依れば淋膿眼十人、トラホーム十四人である、我が東京眼科病院の表は、淋膿眼第二位トラホーム第一位を占むる割合である。千八百八十七年伊國盲人院に於て、初生兒淋膿眼六五%、マグヌス氏は三四%は、初生兒淋膿眼より來る盲人として居る。千八百八十三年巴里に於て、二百人の盲童中、九十人は淋膿眼、ボストンに於ては十八、八%露國モスコー府に於ては、ドヤコノウ氏は、盲人の五%、ダリングル氏は二百八十人中で、二%は淋膿眼より來る盲人として居る。以上は其の大略を述べたのであるが、更に慘毒を流し、其の和樂を破ることの甚しいのは恐くこの病氣の右に出づる者はなからうと思ふ。

四　花柳病と初生兒

風教德行の破壞からして、花柳的の疾病が年々上下を通じて、其の數を增し猖獗を極めつゝあるは我國の現在の景況である。私は幼時兩親から聞いたことがある、其れは花柳病に惱む人が坐した蒲團

は勿論、其座敷にすら坐し、且つ入ることを忌み嫌つたと云ふ事である。如何に此の疾病を恐れたかと云ふことは、此事實に依りて明である。從て如何に此の卑むべき花柳病を社會の外に排斥せんと、努めたかと云ふ事も明である。然るに近年は誰人も此の疾病に罹ることを愧ぢぬ程に多くなつたと云ふ事は其の專門醫家の著しく增加したのを以ても十分に證するに足るだらうと思ふ。斯の如き時勢であるが上に、個人的衛生思想の、頗る幼稚なる今日であるから、彼此合同して早晩市街、巷村盲人の巢窟となるも、亦圖るべからざることであらうと思ふ。故に此際私は此の疾病の豫防法として、藝娼妓の檢診を嚴にする事と、分娩前產婆をして、二%の微溫硼酸水にて、數回腟內の洗滌をなさしむることと醫師ならば、クレーデ氏に從ひ分娩後直に二%の硝酸銀溶液の點眼を、隔日二回施すことを必要とする。尤も成るべくは專門醫に托して施すことを、最も安全なるものと思ふ。又其の眼瞼腫脹し、且つ膿汁を漏す者があつた時は、必ず醫治を受けしめねばならぬと云ふ、法律命令の出でんことを望むのである。斯く致したならば、此の盲人の增殖を未發に防禦するの一助ともなるであらうと思ふ。併し產婆などが點眼したりすると、其れが爲にひどく眼を傷ふことがあるから、醫師以外の人は點眼しないやうに致したい。此より本題に移つて、此の疾病の原因種類症狀等を略述し、局を結ばうと思ふ。

五　痲毒性膿漏眼の黴菌

抑々此の痲膿眼は傳染毒より來る所の病氣であつて、眼から膿の漏るを形容して、名けたるものである。又化膿性結膜炎(Conyung Citispurulenta)或は結膜膿漏眼(Blennorrhoer Gonnorhoika)と、初生兒痲毒性膿漏眼(Blennorrhoer Neonatorum)との二種に分類するけれども、其の發病體は何れも孔微なる寄生物たるゴノコッケンの襲擊に外ならないのである。急性膿漏眼の分泌物の中にはナイセル氏のゴノコッケンを含んで居る。急性及び慢性の痲膿眼の分泌物は、ビーリングル氏の說に據ると水を以て稀薄すること百倍に至る時は、其の感染力は全く消滅する。又膿液を布片に取りて之を乾燥するに三十六時間を過ぎ去るときは、已に其の傳染力を失ふと云ふことである。且痲膿眼は、屢々流行性となつて、各人一齊に發病することがある。假令ば兵營、囚獄、學校等に發生して、忽ち傳搬すると云ふやうな有樣である。フオン、グレーフエ氏の說に據れば、空氣の流通に因ても、亦能く有毒分子を傳播するものである。男女とも旣に久しく時を經たる痲疾の分泌物も、結膜に接觸すれば尙ほ感染するの性を有して居る、白帶下からして膿漏症を招くことがある、フレンケル氏の試驗に因れば、婦人の白帶下中にナイセル氏のゴノコッケンと名くる黴菌と、同狀異性のものを含むと云ひ、又ブンム氏も惡

露中に同じく此の黴菌を發見したと云ふことを報告して居る。

六　淋毒性膿漏眼の症狀

淋毒性膿漏眼の症狀に就いては、最も了解に便なる爲、之を急慢の二性に分つて細論する、急性の淋毒性膿漏眼は、他覺的症狀(醫士の診査して知るべき症候)としては、第一に眼瞼が甚だしく腫脹し上眼瞼は浮腫下垂して、容易に開くことが出來ぬ。眼瞼の結膜移行部は、皺壁を呈して甚だしく充血し、且つ腫脹する眼球の結膜も亦充血する、初期には著しく角膜周擁充血を隱蔽する、茲に至ると結膜は腫脹して、角膜の周圍に輪狀の隆堤を作つて、屢々其の境緣を踰えることもある。分泌物は疾病の時期が異なるに從つて、其の性を變ずる。初は淚液を洩すが、忽ち溷濁して膿狀となる、其の分泌物の夥しいことは決して加答兒炎症の比ではない、已に二日より三日に至れば、分泌物は濃厚となる而して眼を開けば膿液眼内に充塡して、其の部位を明視することが出來ぬ程、多量となる斯う云ふ塲合に能く之を洗滌して、其の部を檢べると粘膜は血の如く紅色となつて、血を漏す樣になる。尙時日を經ると分泌物は漸次濃厚となつて、膿狀の液に變ずるのである。全身の發熱は稀であるが、局所熱は亢進する。自覺的症狀は初は熱灼及び眼内に異物竄入の感覺を起す位であるけれども、忽ち眼内及び前額に劇痛を發する其の劇痛は、分泌物が旺盛となるに及んで、減少するものである。此の急性膿漏眼は尤も重症眼病の一である、佳良の者であると、八日乃至十日で眼瞼の浮腫が先づ減ずる、次で粘膜の腫脹充血も亦消散し、分泌も減退する。併し乍ら此の如く經過の速なる者は、頗る罕である多くは合併症を發して、日時を經るとか或は又慢性症になるとか云ふものが、多いのである慢性淋膿眼の炎性症狀は、急性膿漏眼の如く、劇甚ではない、卽ち眼瞼の結膜移行部皺壁は、共に潮紅突起して居る、分泌物は稍々多量であつて、一層紅色を帶びて居る、往々又膿狀を呈することもある、慢性膿漏症は、急性膿漏症の如く重症ではないが、亦大に角膜の疾病を誘發し易い性を有して居る。

七　淋毒性膿漏眼は危險

膿漏性結膜炎に合併して、殊に危險症狀となるものは、角膜の疾患である。急性膿漏眼は角膜の榮養を害するもので、初め出來た角膜面の蔓延性透明灰白色の溷濁は、亦自ら消散する事があるから、敢て恐るゝに足らぬ、けれども若し、此の角膜に限局性灰白色の浸潤を來す時は、決して之を等閑に付することが出來ぬ、何となれば二三時若しくは二三日を經ると、終に角膜の表層が、潰瘍に陥る若しも此の潰瘍が、愈々蔓延して深く實質を侵したときは、從つて危險は大なるものである。潰瘍にし

て治癒に赴かんとするときは、其の周邊に淺き灰白色の輪を作つて角膜緣から血管が、之に向つて發生し、輪は遂に破壞されるのである。

八　治療上の心得

話の勢に驅られて、終に專門的に移り通俗の範圍を脫するやうになつたが、此の外、角膜の他の症狀を現すことに就いては、之を以て盡したと云ふ譯ではないが、其等は一切省略することゝするが、併し玆にもう一言申し述べて置かねばならぬことがある、其れは角膜の周圍に灰白色の混濁が出來ても透明を失はぬからして患者は比較的視力を損せぬ故に、直に來る所の危險を毫も覺らぬ事が、往々あると云ふ一事である。治療法は學術經驗兼備の醫師でなければ施すことが出來ぬ。況して俗人にして、多少の智識を有すると云つて、濫に療法を試みるは、最も危險である、其れが爲には適切なる、時機を失つて再び治療の方法を講ずることが出來ない場合となる、此の種の者は、私共の屢々遭遇する所であつて、不幸遂に手を拱いて盲目となるのを待つと云ふ樣な場合となる。けれども膿の分泌が盛であるときには、一度煮沸して消毒した水で洗滌して、清潔にするのは必要であるから、醫師の治療を乞ふ迄の手當として實行するのは、奬勵すべきことである。其の他藥品を使用して行ふ治療は甚だ危險でもあり、且つはお分りになるまいと考へる故に、玆に私はお話をしないが、從來私の經驗した治療法に依れば、殆ど全治せぬ者はない樣に思はれる、これは專門の人でなくば分らぬから矢張省略いたします。

九　豫防法のいろ〳〵

之が豫防法としては、淋疾又は白帶下のある人は、尤も注意して分泌物を眼に觸れぬ樣にすることを心懸けねばならぬ。然るに迷信の甚だしく好んで此の危險を犯すものがあると云ふに至つては、驚き且つ悲むの外はない、東北地方の或一部の人は、淋病に惱むときに際して、此の淋病の尿を以て眼を洗へば淋病は治癒すると唱へて、敢て此の危險を犯して居る。淋病が重いか淋毒性眼病が重いかと云ふことは其の結果を見來れば容易に了解し得らるることであらう、況んや此の尿を以て洗眼するとも只に淋病の治癒するものでないばかりか。只得る所のものは此の恐るべき眼病のみである。此の事實は、私も嘗て屢々目擊したことがあつて、痛く驚いたから、世の迷信を破る爲に、一言陳べたのである。枝を柱とも賴んで蹣跚として歩む盲人を、御覽になつたときは、如何にお考へなさるか、多分惻隱の情の起らぬことはあるまい。惻隱の情の起ると同時に、若しも我れ自ら此の人となつたならば

と云ふやうに、先づ其の人の身となりて、お考へなさい誠に悲しい情ない境遇ではあるまいか、苟も此の心が起るならば。此の疾病に對する準備として、一は衛生の完成と一は風敎上の取締とに大に注意せねばならぬ。

第一八章　諸種眼病（疳眼、水泡性結膜炎、白内障、緑内障、網膜炎、視神經炎、色盲等）の症候と其の豫防治療法に就て

今晩、我が通俗衛生茶話會第百五十回の例會を開くに當り、諸君の集らるゝのは社會衛生の爲であるので、私は樂みに思ふ私は眼科專門であるから、今迄餘り繰返さなかつた諸種の眼病に就いて述べて見やうと思ふ。其れは若い者にもあれば、老人にも多い病氣のいろ〳〵である。

一　疳眼とは何ぞ

よく暑い時に來る眼病に、疳眼と云ふのがある。古來此の眼病は、疳の眼と稱して、恐しい眼病の一つとして居る。此の眼病は俗に鳥目と云つて、鳥の塒に止ると云ふ夕暮になると、眼力頓に薄くなつて、殆ど物が見えない、丁度鳥の眼と同じことだから、さう云つたもので子供に多いのである。此の眼病は、今日の醫學上では、乾燥性結膜炎と云ひ、又角膜軟化症とか書いた本がある。子供が罹り易いので、父兄たる者の心配する所である。單に夜、眼が見えない丈なら、未だしもだが構はないと生命迄失ふこととなるから決して等閑にすることが出來ぬ。此の疳眼を以てナイセル氏は固有の捍菌より來るものと云つて居る。

二　疳眼の第一期と第二期

疳の眼の症候たる其の第一期としては、所謂乾燥性結膜炎の症狀で、極初めはさう分らないが、暮れ方に眼力が薄くなり、緣の下に轉げ落ちるとか、物に躓くとかして、親が氣づくと云ふ按排である此の時の眼を見ると、角膜と云つて黑球の兩側の結膜に、光澤のない糊のやうな、牛乳の表皮のやうな白いものが、附着して居つて、拭いても落ちない。而して眼の結膜と云つて、白球、黑球でない所が、乾燥して光澤がなくなる。私は其の輕いのを小學校の健康診斷のとき、澤山見たのであるが、子供の誕生頃に多くあるのである、子供を產んでから未だ一年も立つか立たぬに、次の子供が出來て乳離をせねばならぬ、乳粉とかコンデンスミルクなどで育てられて、營養不足に陷り、多くはお腹が下つたり乳を吐いたり、乾いた輕い咳をしたりするので、肺でも惡くなつたではないかと、小兒科の

醫師でも訪ふときは、已に第二期の症狀に移つたときである、かうなると病氣が白球より、黑球に浸入して、黑球も光澤がなくなり、白くなつて仕舞ふので、素人は星が出來たと騷くのである。若し療治が後れて、異球が破れ、虹彩が露れて失明でもすると、生命迄失ふことがある。

三　疳眼の原因

疳眼に罹り易い時期は、統計上夏が一番多いが、春も相當に多い。私の永年の實驗研究に據れば、夏は暑熱の爲に腸胃が弱り、動もすれば消化器病に罹るから、其れが爲に營養障害を起すのである。又夏は暑い爲に、つひ運動も怠り勝であるし、其の上涼を欲する爲にこざつぱりした淡泊のもの計り食るから、動もすれば營養不良となつて、疳眼を煩ふのである、又當人でなくとも乳を呑ます母親が食物を祿々食べなかつたり、前述の營養障害からかうして乳汁に異常を來たし、乳呑兒に疳眼を煩はせると云ふことになる。私の病院に於ける疳眼の統計は百六人中第一期六十四人、第二期四十二人、男子六十六人、女子四十人、月別にすると一月二人、二月五人、三月五人、四月六人、五月三人、六月十五人、七月三十二人、八月十三人、九月十人、十　六人、十一月三人、十二月六人の割合であつた。之を見ると暑中病と云つて宜しい。

四　疳眼の治療と豫防

夏などに疳眼に罹つた人に對しては、私は運動を勸める、さう際がない人でも、暮れ方に散歩するとか、家の內で運動するとかさせる。又滋養分を食べさせる。子持の母は、多用に紛れたり、又は古來の習慣として、何事にも良人又は子供を先きにするより、食物が不十分になり易いから、殊更滋養物を食べることを勸めて、滋養物の中でも特に脂肪分に富める、鷄の肝とか魚のてんぷら鰻などを擇ばせるのである。又藥にしても脂肪分を含める力のあるものを用ゐさせるやうにする。尤も私共が強い滋養分のあるものを與へやうとすると、小兒科の醫師は胃腸が弱つて居るのに、そんな强いものを食べさしてはいけぬと云ふので、能く衝突することがある、所が私の言ふ通り實行すれば、害などなくして、早く治るのである。古へより鳥目には、八目鰻を食べれば治ると云ふのは、自然に此の道理に叶つて居る。又昔から土用鰻と云つて、土用の丑の日には鰻を食べねばならぬと云ふのは、矢張夏分は特に脂肪分を食べねばならぬと云ふのは、近世醫學の進歩と共に大に證明されるのである。何氣なく經驗上より言つたやうなことでも、文明科學と一致して人世を保つ上に凡て聽き捨てにならぬことがあることを忘れてはならぬ。

五　水泡性結膜炎とは如何

水泡性結膜炎と云ふものも隨分多い病氣である。此をば眼の結膜に水泡を發生し、又は角膜にも發生し、羞明ある疼痛もある眼病にて、エフエルスブッシュ氏は、結核黴菌を發見したと吾々在學當時講述されたことがあつた。皮膚の虛弱な腺病性の子供に多く、特に工場學校等塵埃の刺戟より來る。小學校運動場をアスファルト敷にして、其の粉末で眼を刺戟すること甚だしいので、そんな處で多く見るのである。特に其の新らしいのに著るしく多く、嘗て區内永田町小學校にて此の病氣が流行でもするかの樣に、一時數十人突發して、校長抔も騷いたことがあつた。併し傳染病でもない樣で、一週間位にて容易に全治するも、體質の惡い子供は度々發生することあり、注意するが宜しい。

六　トラホームと瘋眼と近視

其れから學生諸君が多いから話して見たいが、トラホームと云ひ、瘋眼と云ひ度々講說したことがあるし、殊に恐るべきトラホームに就いては博文館發行のトラホーム豫防法を始め、數種の著書もあるから、こゝには略する。瘋眼もトラホームに次で、盲目にもなるし、急激なる點から云ふとトラホーム以上であるが、此れは前章に委しく述べたから御覽下さい（トラホームの症候豫防治療法も別章にあります）其れから近視眼は、高等教育を受けた人ほどに多く、陸海軍の學校などでは、最も八釜しく云はれるが、普通の職務に在つては、不便なるから眼鏡を以て矯正をすることが出來る。つまり文明の利器を巧に應用さへすれば、盲目になることは極めて少數である。之が豫防法としては讀書、裁縫其の他の細い仕事に注意し、薄暗い光明の下、又は餘り明るい光線を直接に受けないやうにし、眼鏡は必ず眼科醫の診察に依るべきである。近視眼に就いては前章に講話し、ドクトル井上豊太郎著近視の話と云ふ刊行本もあるから、其れで承知されたい。

七　そこひとは何ぞ

俗に、そこひと云ふ眼病は、どんなものであるかと云ふに、醫學上から云ふと、眼底病と云ふ表面に現はれたる所の眼病を除いて、他の一切の眼病を稱したもので、其の範圍頗る廣く、今日では數十種の多きに區分されて居る。藥劑を施したり手術をしたりして治るのもあるし、治らぬものもある。昔は精巧な器械がなかつたから、眼の底迄見ることはむづかしく、從つて此の眼病は治し難いものとなつて居たが、彼の獨逸のヘルムホルツと云ふ人の發明で、眼底迄見徹す眼鏡が出來て、大に治療の効果を擧げることが出來た。此のヘルムホルツと云ふ人は、數學などで伯林大學の教授とし、近世の學

者であつた。私が大正二年留學の折伯林大學庭前に於て、同氏の記念像を見る度に禮拜を怠らなかつたが、同氏は他にも種々の發明があり、醫學界の大恩人である。其の眼底を見徹す器械を發明せらるゝや、宛も闇夜に光明を得たるが如く、眼科界を一新した人なのである。眼科界に於てグレーフエ。ヘルムホルツの二氏を二大聖人なりと尊ばれて居る。

八　白内障の症候と治療

前述の如く、そこひとは眼の表面に現はれたる、即ち黒球と白球と瞼などの病氣を除いては、此の中に入るのである。で、白内障幷に綠内障と云ふも其の中の一つである。下度眼の表の皮の直く下、黒球の直ぐ奥に光線を集中し、視力を調節するレンスと云ふものがある。此の機關が白くなつて、眼を傷めるので、俗に膿そこひと云ふもので、次第に眼が惡くなるものである。昔は此の膿そこひに對して、別に治療法がなかつたので、一生の不幸としたものであつたが、近來は其のレンスを剔り出す手術があるので、大低は治して仕舞ふ、旨にもならぬと云ふ幸福がある。此の病は若い者に少く四十過ぎて鬚髪に白髪を交んとする時に、發し易いから用心せねばならぬ。私は此のレンスの發達に就て、研究した論文があるが歸する所、毛髪と先祖を同じうするから、白毛を見る四十以上からボツボツ來る眼病である。

九　綠内障の症候と治療

其れから綠内障と云ふは、矢張若い者に少く、四五十の人に多い女などは月經の閉止する。前後が多い白内障は、レンスが白くなるのであるが、綠内障は虹彩の病氣なのである。此の眼病の症候たる初め眼がカスミ急に頭腦が痛み、嘔吐を催し視力が見へなくなる。電光クラウコームと云つて、一夜の内に失明するのがある。其の頭腦の痛むや眼の内壓が亢進して、ムヅ〳〵し瞳が開いて、死人の眼のやうに擴つて仕舞ふのである。檢眼鏡で眼底を見ると坪のやうに陷沒して、慘酷の形狀を呈し、こに七轉八倒の苦痛を見るのである。尤もさう云ふ風に激烈なのは少いが、一日若くは二日若くは、三日若くは四日に至り、目が赤く、頭腦が痛み、一時に兩眼に來り、又は左眼又は右眼に來り、一月乃至二月、乃至半ヶ年の内に次第に盲目となるので、早いのもあれば晩いのもあり、急性もあれば慢性のもある、炎症性のもあれば無炎性症のもある。炎症性のは赤くなつて、熱を持ち腫れ脹れることは、火を二つ書いて炎と云ふ字を見ても、想察が出來此の炎性は氣管支炎でも、肋膜炎でも、肺炎でも模樣は一つである。此の炎の多少で急性とも云へば慢性とも云ふ。此の眼病は男よりも女が多く、

殆に四十乃至六十の者に多い、早く注意して眼科專門醫にかゝり、時機を失せずして手術を施し、瞳に孔を開けるとか、一部を剔り取れば、頭痛もなくなり、盲となることも免れる。此等も眼科醫界の進歩した、近來の賜である。所が何是れ位のことはとか、又は其の内には治るだらう位に、苦痛を我慢して居り、愈々遣り切れないやうになつてから、私などの所に泣きつく人が少くない、こんな風では最早手遲れで、名醫も術を施すことも出來ないのである。だから、治療の時機を失はないやう、其れと見たら、一刻も早く專門醫の診斷を仰ぐが良い。

一〇　眼の外中内脈絡膜の病氣

以上はそこひとは云へ、眼の一番底の部分でなく、中程の所で、俗に中ひ、とも云ふのである。一體眼を分けると、表面を包める膜が鞏膜で、眼の形を維持するを目的とする。其處に白球や黒球があり病としては、流行眼、**トラホーム**種々の結膜炎瘤眼などがある。又後鞏膜に葡萄腫と云ふものが出來ると、質の惡い近視となつて、眼鏡も用をなさぬ因に中央の黒球を角膜と云ひ、周圍の白球の上層を結膜其下層を鞏膜と云ふ。其の内周圍に脈絡膜と云ふものがあつて、血管に富み、眼球の營養を掌るのである。此の脈絡膜が結核に犯され易く、又梅毒性の護謨腫とか、肉腫とか癌腫とかが來る、眼球の奥に來る惡性のものは、大抵此の脈絡膜に出來るのである。多く獨逸邊では屠牛場附近では蛔虫迄其處に生ずると云ふことである。日本では肉食の少いためか稀である。寧ろ報告を見ない。

一一　網膜炎の症候と治療

眼の脈絡膜の内側を網膜と云つて、色々の影を映ず所がある、此の網膜に腦髓より視神經が通じ、初めて物を視るのである。此れは丁度、腦と云ふ電信局から、視神經と云ふ電線を通じ、網膜の家に傳達するのである。だから物を視ると云ふ眼の目的に對しては、此の視神經と云ひ、其視神經を包圍する膜を網膜と云ひ、最も大切なものでこゝに障害があれば、物は見えなくなるのである。網膜の病氣は、黴毒、結核、糖尿病、腎臟病などの人が罹り易く、又惡性の貧血、姙娠全身の病氣から發し、長く苦むのである。此の網膜炎の一種に色素性網膜炎と云ふのがある。疳眼の如く、白眼黒眼をも犯さずして鳥目の如く、薄暗いときとか夕暮になると、物が見えない疳眼とは違つて、同じ鳥目ながら治り難い。此の色素性網膜炎は多く遺傳に由るもので、私共は偶々診察することがあるが、父母又は祖父母が此の病を煩つて居る。又血族結婚者の子孫に多い。殆ど先天性とも云ふべきものだから、治療に骨が折れる。組織の變化したのであるから、長い眼病である。早く專門醫にかゝり養生しないと、

一生盲目になるのである。

一二　視神經炎の症候と治療

其れから視神經の病氣は、其の本たる腦より來るものが多い、其れは視神經炎と稱し、始めは視神經が赤く腫れて、後には萎縮して仕舞ふのである。多く全身の病氣から來るが、一番の性質の惡い病氣で、脊髓病から來るものは治療最もむつかしく、そこひの中の難病である。同じそこひも內側の程重い。黴毒結核などから來るものもあり、視神經丈の病氣もある。例へば肉眼むき出して日蝕などを見やうと思つて、急に網膜の火傷などを起し、視神經、網膜迄惡くすることがある。日蝕などを見るときは色眼鏡、假令ば灰色又は黑色の眼鏡を掛けるが宜しい。

一三　色盲の症候と治療

視神經の病氣の一つに、色盲と云ふかある。此れは御承知の如く色を見分けることの出來ない病氣で患者は昔より殖えて居る譯でもないが、昔は左程に氣に懸けなかつた。固より傳染などはしないのであるが、遺傳はする樣である。近來科學の進步と共に陸には鐵道、電氣、海には蒸汽船、軍艦などがあり、或は各國の旗色、徽號、赤とか靑とかの種々の旗號などを見て、即座に相當の處置をしなければならぬ。色の知識即ち生命と云ふべき場合がないことはない、殊に運轉夫船乘に於て、當に然るべきである、又實業の方面に於て、畫工或は染色屋、呉服屋の如く色彩の敏速なる感覺を有せねばならぬのもある。從つて中等以上の學校に於て、入學試驗に當り體格檢査の際、色盲の人は通さぬと云ふこともあり、近來色盲の人が非常に殖えた觀がある。色盲にも色々あるが、第一全色盲とは外界全く灰白色に現はるゝ症にして、甚だ稀有に屬す。第二は赤色か分らないとか、綠が分らないとかゞ一番多い、併し先天的の色盲で矯正出來ないの計りではない、一つは幼少以來、色彩に對する小學校又は家庭の敎育が足らない爲に、色を分別するを知らず、已むなく色盲となつた人がある。そんなのは練習さへすれば治ることが出來る。併し神經の不完全から來たものは、頗る難病で治る見込がない。英國の理學家ダルトンは、自分自ら色盲に罹り、之を詳述したるを以て世にダルトン氏病の名あり、數多の患者は自己の修養により、恢復するものあるも遲鈍なものは常に不當の答を爲すことあり。こんなのも世に多いのである、こんなのは色彩の修養に心懸ける事が肝要である。色盲の人は色彩に關係のない職業を執るに限る。何しろ全身の營養を良くし、過度に眼を使はぬやう、過度に腦髓を使はぬやうにすることは大切である。後天性に來る色盲は、網膜視神經又は視神經中樞部の疾患に於て、屢々見

る病氣にして、特に視神經アトロヒーに於て、色盲を發す其の顯はるゝや初め、綠色盲赤色盲次で黃色、終りに靑色の知覺消失す、故に吾々眼科醫は視力障害が屈折器より來るか、眼底病より來るかは色盲檢査に依りて診斷するのである。

一四　活動寫眞と眼

近來流行する活動寫眞は、單に敎育上又は風敎上良くない計りでなく、又全身の衞生に惡ひ計りでなく眼の神經を疲勞させることが多く、眼を害することは少くない。當人は固より最も父兄の注意すべきものである。

一五　眼と神經衰弱

近來、生存競爭の激しきに伴れて、神經衰弱などを煩ふものが多く、從つて意志薄弱、元氣消耗するものが少くないが、此等も眼病と關係することが少くない。腦神經衰弱より視神經疲勞を來し、種々の眼病より腦神經を衰弱せしむることは當然の事實で、目前此の如き人は多くして、自他の不幸を招くことが少くないから、諸君は眼の養生に注意され、不定又は過度の勉强することなく、眼を安靜にして休めること、眼に異常あるを氣付かば直に專門醫の診斷を仰いで、之が治療を努め最も全身の養生殊に腦神經の衞生に努めたい。又眼が惡くて前述の如く、動もすれば頭腦を惡くし從つて記憶も惡くなる、神經を弱めて一生の不幸を來すことがある。特に靑年諸君は眼の衞生と全身の攝生とに注意して一生の快樂と幸福とを兼ね持たれんことを希望する。因に私の先年著した『通俗强眼法』は眼を强くして、眼病を未發に防ぐ方法を詳しく書いてあるから、强眼法の詳細は該書に就いて見られんことを玆に紹介し置く。

第一九章　角膜實質炎及び虹彩毛樣體炎と交感性眼炎の症狀及び其の注意法

一　角膜實質炎とは何ぞ

角膜實質炎とは俗に云ふ黑玉に於ける疾患にして、始め角膜に灰白色の小斑を生じ、其の表面は光澤を失し、此斑點の數は漸次增加して、周緣に向ひ進行するも中央は最も厚きを普通とするのである、終に全角膜は乳白色硝子樣灰白色の涵濁を以て充たし、其の蔓延後は周緣より血管を發生し、漸次吸收を始め周圍は先きに消散す。併し中央部には。尙ほ白き翳を貽し視力を障害するのである。此病氣は極めて慢性にして、炎症は一ケ月乃至二ケ月を經て、極度に達し次で混濁は消散し、角膜は透

明に復するものとす。此病氣の主なる症狀は疼痛、羞明及び流涙の如き炎性刺戟症狀である。而して虹彩炎及び毛樣體炎等も、亦殆んど併發す本病は通常兩眼を侵すも、一眼づゝ前後に襲はるゝものを多しとす。

（經過）は比較的良好にして全く、失明するものは意外に尠きものである。

（原因）は幼年者の疾患にして、五歳乃至二十歳の間に多く、女子は男子よりも此病に罹るもの多しとす。其多くは父母の遺傳黴毒より來るから、兎角斯る病兒の姉妹兄弟は流産したり、早産したりするのである。黴毒性父母の小兒死亡數は五十%以上の多きに昇る、故に斯る病人の特徴として、ハッチンソン氏の齒牙を有するのである。其他腺病質結核質の者も多く、此病氣に侵さるゝものである

（療法）體質を佳良にし海岸等に轉地せしめ、强壯藥を持長せしめ滋養療法の外、局所治療は眼科專門醫の施術を需め、病後に併發する眼疾を豫防することが大切である。

虹彩毛樣體炎

二　虹彩毛樣體炎とは何ぞ

此病氣は虹彩（俗に佛と云ふもの）の色を變じ瞳孔は縮小して反應鈍し黑玉の周圍充血し、羞明流涙を伴ふものである。此病氣の主なる症狀は眼球の緊張、眼瞼の浮腫（特に毛樣體炎）視力障害頭痛等であるも、單純なる虹彩炎のみに止まる時は、變化も輕きことなれども、毛樣體炎である時は、滲出物の爲め內壓大に增進す、末期に至る時は滲潤物の萎縮に由り、內壓は大に減退するのである。

（原因）虹彩毛樣體炎は黴毒、腺病、結核、僂麻質斯、淋毒、糖尿病、蛋白尿等の全身的疾患より來るもの多しとするのである。

（症狀及び豫後）單純の虹彩炎は豫後總じて良性なれども、毛樣體炎と合同の者は、視力の衰耗は勿論、虹彩後癒着を來たし、尙ほ進んで瞳孔壅塞に陷り、義膜を以て瞳孔面を閉鎖するので、末期に至れば、水晶體の混濁網膜及び脈絡膜の痩削症を併發し、遂に失明するに至るのである。

交感性虹彩毛樣體炎

三　交感性虹彩毛樣體炎とは何ぞ

交感性虹彩毛樣體炎とは、一眼既に虹彩毛樣體炎に罹り居りて、他側の健康眼に同一の炎症を傳達する眼病を云ふのである。而して其多數は前驅症を有するので、患者の多くは細事業を執るに當て、視力俄然不明となり、一時休息するに非らざれば、就業を繼續し能はざるものとす、此視力障害は調

節機の衰弱より來るものである。加之ならず光線に對する知覺過敏症を發し、稀には劇痛に苦むものである。此有樣を名けて交感性神經症と云ふ。斯る容體を發してから、二三日乃至一週餘にして本症狀たる炎性を發病するに至る、其主なる點は毛樣充血、瞳孔縮小虹彩の變色、虹彩後癒着、浸潤物を生ずる等である。又羞明、劇痛を伴ひ一回の炎性發作にて、既に環狀或は全虹彩後癒着瞳孔の閉鎖等を來すのであるが、適當の治療を加ふる時は、數週にして炎症消退す、併し屢々再發して內壓亢進、或は眼球瘦削症を續發して。遂に失明するに至る。

交感性眼炎は虹彩毛樣體部の外傷、特に該部の穿通創傷に虹彩及毛樣體を溶着し、眼球內に異物遺存する時本症を度々誘發す。炎症の傳達する時期は損傷したる、虹彩毛樣體炎炎症の最も盛なる時に在つて、第一眼の損傷後四週乃至八週後にして、第一眼既に瘦削するも再び、炎症を再發する時は又交感の危險あり、斯る場合は損傷眼に異物の遺留するを證明するのである。故に第一眼の負傷後四十年後に發したる數例あり、偶々虹彩毛樣體炎に手術を行ひし其後に至り、他の健康眼に交感性眼炎を誘發せし例を經驗せしことを報告せし人もあつたが予も屢々經驗せり。

交感性眼炎傳達の徑路に就ては未だ確定せぬ、彼のマッケンジー氏レーベル氏ドイッチュマン氏は炎症產物又は孔微微菌が、患側の視神經を傳ふて、後方に移轉し視神經交叉部より、他側の視神經を前方に移行して、健眼を襲ふと云ふのである。又病眼の毛樣神經は其中樞に刺戟を與へ、其よりして他側の毛樣神經に反射して發病するものなりと云ふ一說もある。

（療法）攝生法に注意し成るべく光線を避け、患者をして適當の暗室に收容し、又は黑き保護眼鏡を與へ、又は黑布繃帶等を施すを尤も良とするのである。食物は滋養易化の物を採らしめ、刺戟性の飲料食物を忌むのである。又勞働讀書等は勿論禁ずるのである。既に外傷眼にて交感性眼炎を誘發する恐れあると診斷せし時は、創傷眼を豫防的眼球摘出を爲すを佳とするのである。而して又シュワイゲル氏等の推奬せし、視神經毛樣神經切斷術は實用する程の價値なしとのことである。而して虹彩毛樣體炎の炎症甚だしき時は、猥りに手術を行ふてはならぬ、兎角健眼に交感性炎症を誘發し易いからである。萬止むを得ず手術を要するの場合は炎症の消退したる數ヶ月後を待つて、成るべく毛樣體部を避けて施す樣にしたいものである。

第二〇章　海水浴と眼

塵深い都を離れて、空氣の淸らかな海岸や山に暫し遊ぶは、都會に住む人に取つては、良いに違ひないが、海に往くか山に往くかは各自の體質に依つて考へなければならぬ。身體に惡い土地は矢張眼

にも良くないで、一般に都會の人は神經質が多いやうであるから、海邊に往つた方が良いのである。尤も能く肥えて血の多い人ならば、山を選んだら良いと思ふ。海水浴をする事は婦人なんかには、誰にでも勧める譯にまゐらぬが、大人でも子供でも成るべく、塵埃の溜つて居ない海岸を選んで入り、上つたら直ぐ清水で眼を洗ふと良いのである。青海原を渡つて來る潮風は、決して眼に惡い事はない。

又汐水も眼に入つたからとて、別に害はないのですが、鹽氣が眼に泌みるので手で擦ると、結膜が傷つけられて、其處からトラホームの黴菌や、其の他色々な病毒が入込んで、眼病になるやうな事があります。尚注意しなければならぬのは、幾人居ても手拭を別にする事と、宿なんかに滯在するのであれば、寢具、枕だけは自分の物を持つて往きたいものであるが、出來なければ敷布と枕覆ひは、必ず準備して風呂でも大勢入浴した後に、湯もかへないで入るのは危險である。海岸に眼病が多いと云ふのは、漁村なんかゞあつて不潔にして居るからで、潮風に中る爲ではあらぬ。其れから川に入る時は、隅田川のやうな川尻になると、塵埃が多くて不潔であるから、川上の絶えず水の流れて居る所に入れば害はない。鶴逸坏へ行くと川でも湖でも、ずつと沖の水の清い所へ、完全な浴場の設けが澤山あつて子供でも危い事はないが、日本では波の荒い海岸は清潔であるけれど、浴場が不完全であるから、餘程注意しないと取り返しのつかないことが出來る。（大正五年七月十六日茶話會）

第二一章　習字と眼

一　習字の今昔

明治以前には習字を以て、實用上最も大切なる技術の一とし、且つ人物養成の必要條件としたもので、苟も文字を習ふ人は常に弘法大師、小野道風等の日本三筆を祭り、書聖菅原道眞は天神樣として町村の崇敬する所となり、之に祈つて書の上達を計り、書き古した禿筆を捨てないで、天神樣に奉納した。紙の如き墨の如き硯の如きも、非常に大切にして其の字を認めたる紙を、足にしたり不淨のことに用ゐるなどのことは、夢にもなかつたのであるが、明治維新に當り、內憂外患甚だしく、且つ偏に西洋の文物を吸收することに急にして、此の大切なる習字の事は捨てゝ顧みなかつた。從つて今日の人は、習字を餘計のことゝ思つて居るものが少くない。

二　習字は出世の基礎

能く世間の人は「字は姓名を記すれば足る、西洋文明國では習字を重んじないではないか」と云ふ。これは私共の如く、永年歐洲各國に留學して居たものから見ると、一笑にすら値せぬことである、何

故と云ふと、文明の事務は文字に依つて、最も多く運ばるゝと共に、其の人物の如何は、手蹟に依つて、最も適實に表現せらるゝのである。官衙であれ、商店であれ銀行會社であれ、寺院であれ、工場であれ、醫師、辯護士、教員等は最も必要を感ずるのである。

上役の事務も下僚の事務も、何れも書に依つて辨ぜらるゝ、而して其の人一度故人となりては、假ひ著書寫眞ありと云つても、著書は印刷物なり寫眞は陰影なり、其精神氣魄は手蹟に依つて窺はる。例へば故伊藤公と云ひ、乃木將軍と云ひ其人物は、單り手蹟に依つて、切實に偲ばるゝではないか、されば歐洲に於ても、例へば獨逸であれ、英國であれ、佛、墺であれ、最も手蹟を重んじ其人格の表現として居ることは、日本の昔と同じことである。今の歐洲に於ては教育のある人ほど書を重んじ、特に自分の姓名は自署せねばならぬことゝなつて居るから、日本の如き代筆を恥としない風はない。書の拙劣なる人は社交界にも立ち難く、事務員書記にも就職出來ない有樣である。能書の人に重んぜらるゝことは、東西とも其趣が同じいと云つても良い、特に青年にして書の拙劣なることは、どの位損かも知れぬ、書道にさへ達して居れば、立身出世の緒が開かれるのである。其癖私共も多忙の際には所信を貫くことをしないが、それでも書くときは、苟且にしない而も醫員を使ひ、看護婦を使ひ書記を使ひ、小使を使ふにも手筋を重んじて居る。

三　光線は北窓より

偖眼と書とは密接の關係があるが、先づ光線の上より云ふと、無論光線の不足とか光線の直射を受けることなどは惡いが、其他光線の動搖變化は甚だ良くない。例へば朝の内は馬鹿に明るいが、午後になるとさう明くないと云ふ、東の窓に向つて習字をすることは面白くない。西の窓も南の窓も斯る傾向があるから、成る丈北の窓から採光してするが良い。北の窓なら殆ど同じ程度の日光が來るからである。讀書其他書家、彫刻家も眼を使ふことは、北の窓からしたいものである。又光線は勿論左方より受くるときは、文字に陰翳を生じないから、それからとるが宜しい。其の前面より採ることの害は一つは其正面より受くる爲に腦を刺戟し、腦力迄疲勞さするものである。

四　紙墨は如何

紙は日本紙に書くには、さう注意も入らないが、洋紙ならば餘り光澤のあるものは宜しくない。光線を反射して眼の爲に宜くないからである。近來は細字を西洋紙に認むることは、殆ど一般の樣になつたが、大に注意すべきである。併し墨とか繪具とか云ふものは、黑、赤、綠、紫何れを問はず、鮮明なるを尙ぶ。それは視力を容易にするからである。尙細字は西洋紙ならば、黃とか灰色、とか帶び

た方が宜しい。

五　眼の健康に注意したし

又眼の爲から云へば、文字は成丈大きく鮮明に書くが宜い、特に人に對して亂筆なるは書道に背き實用を足さず、人に不便不快を與ふるのみか、人の眼を惡くする虞がある。印刷所の職工とか原稿の校正又は校閲係等は、常に亂雜なる原稿を取扱ふに依つて、眼を惡くし眼病等を起す者が多い。字を書くには精緻なる眼力を有するから、平素眼の養生に努めたいものである。寫眞師、手工、美術家等は健眼にあらざれば成功しないと云はれてある。常に眼の攝生に注意し、前述の如く光線の變動は最も眼を害するのみならず、腦髓を害するから注意せねばならぬ。私共は職業から暗室で手術等をする爲に、頭腦や眼を害することがある。字を學ぶのも光線とか姿勢とかを注意しないと、腦又は眼の疲勞の爲に、其丈上達を障害する譯であるから用心したいものである。

第二二章　失明者と其の統計

一　失明の原因

醫學上より見ると、盲目には先天的のと後天的との二つがあるが、先天的盲者卽ち失明者は僅少であつて、多くは後天的である。殊に初生兒より五歲迄に失明するもの多く、我が國に於て最も多いのは、瘋眼、瘖眼（營養不良から來るもの）等に原因せる盲目で、各縣別にすると、新潟縣の七十人（一萬人に付三九）が最大數で、神奈川、靜岡も多く、香川縣が最少である。で、今此等の各縣で最大多數のものと、小數のものと平均して、之に依りて全國の失明者數を推算すれば、實に二十八萬人の多きに上るのであるで、此等は全く、不生產的人間となるので、國家社會の經濟上から見ても、非常に不經濟のみならず、其の個人に付ては實に憫然なものである。故に政府では**トラホーム**の豫防法奬勵をなすと共に、失明の最大原因たる瘋眼、瘖眼等に關しても、十分研究機關を起して其救濟方法を講じて貰ひたいものである。

二　失明者の救濟

現今に於ける一般失明者の狀態を見ると、多く盲者は不憫な者と云れて世人より疎遠され、延いて精神肉體の發展を阻害され、將來有望の職業に就いて、獨立し得る身にてありながら、實際はたらけないと云ふ傾向を持つて居る。殊に盲兒に關して此の間違つた同情が彼等の意志を薄弱ならしめ、實際不憫に終らす事は少くない。斯の如く精神的に於ても彼等を保護し、救濟して行くことが必要である

から宗教の力を以て、彼等の爲に精神的慰安の道を講ずると同時に、特に青年の盲人に對し一方盲人學校を各地に設けて實務的教育を授くる事が、唯一の保護策であらう。今各研究者の參考迄に各國に於ける失明者の統計並に原病表及び宗教別を列擧すると次の如くである。

三　各國盲人及び眼病に關する統計表

シンメル氏各國盲人統計表

國名	統計年度	人		
ノルウエーゲン國	一、八六四	一萬人中	一三、七	七三四人に就て一人の比例
チユーリーンゲン國	一、八六一	同	一〇、一	九九五人同
英國	一、八八四	同	九、六	一、〇三七人同
伊太利國	一、八六一	同	八、二	一、二一九人同
佛國	一、八六一	同	八、二	一、二三五人同
シユウエーデン國	一、八六〇	同	七、一	一、四一八人同
サクセン王國	一、八六七	同	六、一	一、六三五人同
白耳義國	一、八五八	同	五、九	一、六八五人同
墺國	一、八六九	同	五、六	一、七八五人同
バイエルン王國	一、八五九	同	五、二	一、九二三人同
プロイセン王國	一、八六四	同	五、一	一、九五〇人同
北亞米利加國	一、八六〇	同	四、	二、四九〇人同

ゲオルグマイル氏盲人統計表（民賢府）

エングランド國	一萬人中	九、八五		
ノールウエーゲン國	同	一三、六三		
墺國	同	五、五五		
シヨワイツ國	同	七、六一		
白耳義國	同	八、一一		
スパニヤ國	同	一一、二六		
北亞米利加國	同	五、二七		
デネマルク國	同	七、八六		

シユウエーデン國	同	八、〇六
ウンガルン國	同	一二、〇一
和蘭國	同	四、四六
佛國	同	八、三七
伊太利國	同	一〇、一六

マイル氏男女兩性別表（バイエルン王國）

一萬人の住民中男性	八、一九
一萬人の住民中女性	八、二三

グツトスタアト氏宗教別に依る盲人統計表

耶蘇新教	一萬人中	八、二八
耶蘇舊教	同	八、四八
猶太教	同	一一、〇〇

チエーヘンデエル氏年齢別盲人表摘要

最多	初生兒より五年迄	九十三人
	五十年より六十年迄	七人

ドクトル、コーン氏盲人原病表摘要（ブレスロー市）

盲人千人に付		九人
先天畸形		百十一人
初生兒ブレノシー（瘋レ）		二十六人
淋毒（成年の瘋眼）		三十九人
一般角膜病	片眼	二百四十二人
眼球損傷	兩眼	十人
近視より來る特發性網膜剝離		四十六人
網膜炎		二十七人
網膜に生ずるグリオーム		八十三人
トラホーム		六人
角膜軟化症（疳眼）		十七人
痘瘡		八人
		三十六人

近視別症（後葡膜中心葡膜スタヒローム）　六十三人

東京眼科病院最近の盲人原病統計表（三百九十一名の片眼兩眼盲に就て調査せしもの）

眼病名		一眼盲	兩眼盲	小計
視神經アトロヒー	右	七人	十六人	三十人
	左	七人		
トラホーム	右	二十八人	十一人	六十九人
	左	三十八人		
白内障	右	十五人	十人	四十三人
	左	十八人		
綠内障	右	八人	十人	二十七人
	左	九人		
角膜疾患（瘖眼を含む）	右	二十四人	八人	七十人
	左	三十八人		
網膜疾患（黴毒性を含む）	右	三人	四人	十三人
	左	六人		
淋毒眼（初生兒及び大人とも）	右	十五人	三人	三十六人
	左	十八人		
眼球瘜	右	十六人	三人	三十四人
	左	十五人		
虹彩毛樣體病（黴毒性を含む）	右	十五人	三人	十八人
	左	十五人		
外傷（火傷を含む）	右	五人	一人	十一人
	左	五人		
グリオーム	右	一人	一人	二人

交感性眼炎　一人　一人

先天性畸形　左　二人　一人　三人

硝子體疾患　左　一人　四人　五人

脈絡膜疾患　右　一人　三人　四人

全眼球炎　左　十二人　八人　二十人

中心動脈エンボリー　右　一人　一人

脈絡膜網膜先天畸形　左　一人　一人

痘瘡　右　一人　一人

眼腫瘍　右　一人　一人

三叉神經麻痺　右　一人　一人

以上片眼盲、兩眼盲を合して其總數三百九十一人、內左眼盲は百四十人にして。男子六十八人、女子七十二人、右眼盲は百八十人にして、男子九十一人、女子八十九人、兩眼盲は七十一人にして、男子三十人、女子四十一人なりとす、故に男盲目は片眼、兩眼を合して百八十九人、女子の盲目は片眼兩眼を合して二百二名となる、而して以上は眼治療の爲に、東京眼科病院に診察を乞ひたるものゝ總

數也、又以上統計の盲目者としたるものは、眼前一尺に於て指數を辨せざるものより、明暗辨別力なきものをも總て含有す。

第二三章　眼の養生法

一　偏に諸君の發奮を待つ

私も獨逸より歸朝して以來、茲に約二十年公衆衛生普及の爲、或は演說に或は新聞に雜誌に、殊に私が主宰する「衞生茶話會」に意見を述べて、大方各位の贊同を得、衞生思想を發達せしめ、衞生を皷吹する新聞が月と共に多くなつて來たのは、眞に喜ばしい結構な現象である。斯く私の主張の時代に容れられたことは、蓋し諸君等の率先贊同せられし爲と、偏に感謝する所である。大正二年再び獨逸英國、佛國、墺國等の大學及都市を漫遊して見たが、都市の衞生等に於ては前年とは大變な相違である、我日本都市の前途を望めば、實に遼遠であるが併し事物には皆楷梯があつて、漸く進むやうにしないと、有終の美果を得られるものでない。故に諸君と共に社會衞生をして、次第に現實しなければならぬ、どうか歩一歩、平素の抱負を遂行せらるゝやう希望する。偖一般の衞生に就いては、略〻意見を述べ盡したから、今は私の專門とする天職、即ち眼科一般の衞生に就いて、少しく述べて見やうと思ふ。ほんの大體から胸に浮んだまゝお話するのである。

二　第一眼を過度に使用せぬが宜い

一の定つた分量の光線が、眼に射入すると直に眼の奥にある網膜と云ふものに映ずるので、それでお互ひ物が見えるのである。所が矢鱈に物を見たりすると、眼の調節機と云ふものが疲勞して、眼精が疲勞し、結膜が充血し結膜炎を起したり、殊に幼年者に至つては、眼の諸機關も軟かいので、習慣的に近視になり易い、ドンデルス氏は調節機を過度に使用すると、內斜視の癖がつき續いて之が爲に視神經穿入部と云ふ所の鞏膜が壓されて延び、近視を招くことがある注意すべきことである、

三　第二腦力を過度に使用せぬが宜い

元來物の見えるのも腦の作用であるから、眼球は腦と密接の關係があるので、視神經の根基は腦の四疊體の部から起つて、頭蓋蝴蝶骨のトルコ鞍部で、交叉して視神經となり、視神經孔と云ふ孔穴を通り過ぎて、遂に眼の窩の內に入り、網膜の或一點に穿ち入るものである。動眼神經、滑車神經、外旋神經の中樞は、皆腦に存在し、其の他眼の動脈も、亦腦の動脈から分岐して居るのである。故に腦

力を過度に使用する場合には、必ず其の影響を眼に及ぼして來るのである。例へば精神が過勞したり憂愁したり、恐怒したり驚怖したりするときは、屹度眼に影響が來るのである。殊に後段に述べる腫瘍の如き病氣は、腦に潜在して恐るべき視神經炎、鬱血乳頭を起して遂には失明の不幸に陷らしむるので決して忽諸にしてはならぬ。ドンデルス氏は、精神と眼とは或必要がなければ、決して同時に疲勞さしてはならぬと曰はれたが誠に格言である。

四　第三塵埃、煤煙を避けるが良い

塵埃は黴菌を傳送する渡舟の如きもので、其れが眼に度々入ると恐るべき眼病の誘因となることがある。又燃燒が不十分の薪炭の煤烟は直に眼を刺戟して、動もすれば病患を讓すから、此の二つを警戒せねばならぬ。其の誘起され易い眼病と云へば、結膜充血、結膜加多爾、結膜炎、水泡性結膜炎、トラホーム、實扶垤里性結膜炎、格魯布性結膜炎、濾泡性結膜炎、角膜表層炎及び實質炎（膿瘍、潰瘍）虹彩炎等で或は回復の出來ぬやうなことがないとも云へぬ。故に斯る場合には適宜の保護眼鏡を裝用するが宜しい。

五　第四煙草は成るべく用ゐぬが良い

烟草の主成分は、青酸に似て居る油狀アルカロイドなるニコチンで、之を水に溶解すると揮發し易い性がある。故に烟草の葉を數年間放置したり、或は之を水に浸して製造すると其の毒を減ずるし、又高い熱に逢へば其の毒が消失するが、中には回く捲いた烟草で包紙の良くないのは、十分に燃えないから、ニコチンの害毒は遠廻りして、眼に及び弱視又は中毒性視神經炎を招來する位だから、直接である喫烟の烟は一層眼の爲に惡い、故に若し强て烟草を吸はうと思へば、成るべく空氣の流通し易い場所、室内ならば窓口を開いて、長い烟管を用ゐて喫烟するやうにし、又深く氣管に吸入せぬやうにしたい。烟草の濕いのは良くない。紙卷ならば燃燒し易いやうに、緩く捲いたのが宜しい。

六　第五酒類の飲用に注意するが良い

酒類即ちアルコール含有の飲料は、古來嗜好品として攝取する飲料で、之を適度に用ゐる時は、身體の諸機能をして爽快ならしむるもので、偖こそ百藥の長とも稱せらるゝのであるが、此れも亦過度に飲むときは百毒の魁となつて身を失ひ、財を失ふのは人の諳んずる所であるさなくとも、酒は自ら度を過し易く爲に營養障害を來して、いろ〳〵の臟器の變性を起し、殊に眼に於ては一時充血を起し結膜炎を誘發し、或は在來の病氣を惡くして、終には視神經を損ひ、中毒性弱視となるものである、

俗に飲酒家を誡めて一杯は虎、二杯は羊、三杯は豚と云ふのを見ても、其の多少を論ぜず、飲まぬ方が宜しく健康にして長壽をするを常とする。

七　第六寒冷高熱は避けるが良い

健眼の人でも寒風に向ひ、或は高熱に逢ふときは、涙液の分泌が減じて乾燥するが爲め結膜炎の原因となり、進んで角膜を損害する、殊に高熱は汗の分泌を増し、從つて汗は眼の内に流れ入つて、眼を刺戟し、いろ〳〵の結膜病や角膜病を誘發する虞がある。殊に眉毛を剩り落す風は禁じたい、又曉天に星を戴いて出で夕に月を踏んで歸り、炎暑の候又は朔風膚を劈く嚴寒にも、力役勞働して閑のない農夫や、又は海風捲砂の中を終日勞働して毫も意としない漁夫等には、眼病患者の多いと云ふのも之を證明して十分である。

八　第七光線の直射を避けるが良い

眼と光線との關係は、前述の如く過不及のないやうせねばならぬ。眼の内に光線の直射が永く續くと、終に失明し或は在來の眼病を増惡するものである。歐羅巴の古代に於て囚徒を刑に處するに熱の燻な鐵板を其の眼前に近づけて其の照輝力に依つて、失明に陷らしたと云ふ慘酷なことがあつた。凡て光線の直射を受けると結膜、角膜、水晶體、脈絡膜、網膜、視神經等を病み易いものである。只に直射光線のみでなく、反射した光線も亦其の原因になることがある。彼の盛夏炎熱の海上、海濱、砂漠とか、又は雪の野や氷の上は光線の反射に依つて、眼病に罹り易い所謂雪盲症と云つて、廣漠なる雪の野原を行くと斯る病がある。近來は又電氣性眼炎と稱するものがあり、又劇しい光線に逢ふときは視力が減じたり、過敏となつて甲は夜盲症を來し、乙は晝盲症即ち晝間は視力が減弱するが、夜になると通常の視力に復するやうな病氣を來すのである。近頃カウトロン氏の報告に、或日電燈に向つて業務を執り、尚光線を明くさうと思ひ、黒色保護眼鏡を除いた所が、翌朝から眼内は灼けるやうに痛く、至つて羞明く眼瞼は腫れ脹れ、開くことが出來ぬやうになつたとのこと、又天文學者ガルレリー氏は、日蝕の觀測をした爲に網膜に火傷を起し、失明された餘程注意せねばならぬ。日本人は西洋人に比べると、黒色素に富んで光線を吸收するから、何れかと云へば常に保護眼鏡を用ゐるが良い。

九　第八衆人群居の室を注意するが良い

寄席演劇等多人數の群集する場所は、十分に之を注意しないと、**トラホーム**、**ブレノレー**の如き傳染病を感受し、又炭酸の鬱積は直接に眼を刺戟して、色々の結膜炎を惹起するのである。故に此等の

注意を怠らぬやうせねばならぬ。殊に以上の眼病は、觸接傳染であるので、他人の器具用品特に手巾等には觸接せぬやうにしたい。

一〇　第九清潔にする習慣を付けたい

凡て黴菌と云ふものは、不潔物中に好んで繁殖し、清潔な物には生活することが出來ぬものである故に身體、衣服、毛髮、手掌、爪等は常に石鹸で洗淨し、別して爪の如きは、一日一回は必ず之か掃除を行ふが宜しい。居室も亦常に清淨にして、塵埃を溜めてはならぬ、又時々日光を室内に導き夜具等は度々日光を通すが宜しい。西哲の所謂「日光の來らぬ家には醫師來る」とは金言で、實に日光は病毒の大敵である。彼の病菌は斷えず、私共の身體を窺ひ、襲撃せんとするものであるから、常に清潔を心懸けなくてはならぬ。

一一　第十賣藥は妄に用ゐぬが良い

元來賣藥と云ふものは、萬病一藥と云ふので、益のあるとは少い。然るに眼に異常があると直に賣藥を眼に點じて、僅か數滴で治る眼底病も一瓶で治る抔と云でたらめ廣告を信じるのは、最も危險である。私の日々目擊するトラホーム患者の如き、多くは最初は皆賣藥に一任して、一時を防ぎ再三再四點入しても、遂に効のないのみでなく、刺戟藥の點眼が續く爲に、結膜が朱のやうに赤くなり、又血管を貧血にするアドリナリン抔を亂用して、角膜の營養を害して取り返しのツカヌ片輪になつて來るものもある。今更の如く驚き始めて醫師の許に診療を乞ひに來る人がある。併し此時は已に手後れで、如何ともすることが出來ず實に氣の毒と云はねばならぬ。

一二　第十一入浴に注意なさい

歐洲に於けるお湯屋は、我が國のお湯屋のやうな浴槽でなくして、一人浴した後は、必ず其の湯を交換するので常に清潔であるが、我が國の如きは數百人の入浴は、一槽の中で行はれ、只毎日一回之が交換をするに止るので、常に湯は濁り、不潔で汚穢で比較にならぬ。嘗て猶太教會で、神水に浴する云ふので、多くの婦人が同時に日を定めて混浴して、爲に諸病の傳染を來したことがあつたと云ふことである。又入浴の際は浴槽の湯で顏を洗はぬこと、洗桶なども熱湯、消毒してないものを使ふのは危險である。入浴の時間は滿腹の時、或は極空腹の時を避くるが良い。

一三　第十二手淫、過淫を慎むが良い

ドクトル、コン氏は性慾のことに就いて、大に研究された人であるが、手淫をしたり過度の房事を

することは能く膀胱炎、眼瞼痙攣症、結膜炎、眼精疲勞、心臟、脊髓の疾患を誘發し續いて視神經萎縮を來し、或は網膜貧血等に陷ると說かれた。殊に私の實驗調査する所に依ると、我が國學生の弱視は間接に手淫より來るものが少くない、禁ずべき惡事である。

一四　第十三適度の運動をするが良い

運動は云ふ迄もなく、身體の新陳代謝を旺盛にするものであるから、お互に長壽を保たうと思ふなら、適度の運動をしなくてはならぬ。若し過不足があると、胃腸の工合が惡くなり、腦に充血或は貧血を來し、續いて色々の眼病を誘ひ出すものである。故に食後は適當なる運動を必要とするも、常に食後三十分を經て、身體諸部の溫感を覺え、汗の浸み出す位の運動を、適度に斟酌して行ふが宜しい

一五　第十四刺戟ある食物は特に注意するが良い

普通嗜好品として唐辛、胡椒、山葵等を食するときは、眼を刺戟して眼病を招き易いから、餘計に食べてはならぬ、殊に眼病の人には禁物である。彼の刺戟性の香味用を多く食べるより、消化不良又は胃痛を來し、次で眼の營養障害を醸すから、適宜に用ゆるが宜しい。

一六　第十五脂肪食は適宜に取るが宜い

昔から眼の惡いものは、脂肪食をしてはならぬと云はれて居るが、彼の乾燥性結膜炎、視神經萎縮症、網膜貧血殊に全身病より來るものに於ては、定量迄は缺くことの出來ぬ滋養品である。私の病院などでは、眼病を治療するに決して減食法に因らないで、營養療法を行ひ常に好成績を得て居る。

一七　第十六育兒法に注意なさい

今日に於ては山間僻地と云つても、到る處に牛乳位は普及して居るが、古來の習慣として人乳で育てることの出來ぬときは、往々片栗粉又は葛粉の如き澱粉を與へて、人乳の代用品としたが乳兒の如きは消化器の發育が完全でないので、膓胃の不調和を來して營養の障害を起し、眼に於ては結膜乾燥症、俗稱疳眼を起したり、或は恐るべき角膜軟化症を誘發して潰瘍に陷り、遂に盲目となることがある。結膜乾燥症に就いては、諸家之を黴菌說に論及して居るが、育兒法の不良に依つて誘起するものゝ多いのは、私の常に經驗する所で、彼の監獄内や一般下級の部落を侵し、殊に露西亞の北海岸に於ては、筋骨の枯瘦した者に多いのでも、知ることが出來る故に育兒法に於ては、人乳の代用としては牛羊の生乳が宜しい。其の生乳は新鮮なものを選んで、一定の器に容れ乳皮の浮ばぬやう、能く攪拌

ぜて煮立たせ、之を薄めるには矢張煮沸した水を入れるのである。生後一ヶ月に至る迄は、凡そ牛乳二合に水三合六ヶ月位迄は、凡そ等分で宜しく其れから牛乳を水の倍にし、九ヶ月以上は純粹の牛乳で宜しい。次に與へる量は第一日には、五グラム(凡そ三匁)とし、爾後三〇グラム乃至五〇グラムを增加するのである。生乳で育つた子供にはそんなことはないが、コンデンスミルクを計りで育つた子は往々痙眼に罹るを能く實驗した。山間の僻地などで新鮮の牛乳を得難いときには、所謂コンデンスミルクを代用するも宜いが、又ネストル氏小兒粉を四ヶ月以上の子供に用ゐることも良い。其の他乳汁から他の食物に移らしむる時期は、一定し難いが、凡そ第十ヶ月乃至十五ヶ月の間に於て次第に習慣を作るのである。又筋骨の柔軟なる子供を背に負ぶることは注意すべきである、何となれば之が爲に子供の胸腹を壓迫し、筋骨の發達を障害するのみでなく、血行の還流を妨げ遂には眼に鬱血を來して眼病の遠因をなすことがある。

一八　第十七眼鏡の使用に注意なさい

眼鏡を選定するには、第一に其の度を選ぶと共に、眼鏡の製造家をも選擇すべきである。凡そ眼鏡の中心と、瞳孔の中心とは一直線内になくてはならぬ。併し眼鏡の不便は肉眼の如く、遠近に對する調節作用がないので、ウオルラストン氏は一種の眼鏡を裝置して、其の一幹中數箇の調節をなすレンズを具有する物を用ゐ、彼の有名なるフランクリン氏は、眼鏡中二箇のレンズを上下に接し、バントスコピッセ氏の眼鏡は遠近の距離に隨つて、鏡内と鏡外との二ヶ所から、物體を見るやうに裝置した眼鏡を作つた近視、遠視、亂視、老視、そして物體を復視する斜視の如きは、一定の眼鏡(凹凸鏡チリンデル、プリスマ等)を裝ふは勿論、又塵埃夥多の場合や結膜炎、角膜炎、虹彩炎、網膜炎、脈絡膜炎に罹つた場合(此の如きは墨色、灰色、綠色等の眼鏡を用ゐる)職業として、瓦斯の刺戟を眼に直接に受けるもの(化學家、鍛冶工)外傷を受け易いもの等には保護眼鏡を用ゐるのである。普通保護眼鏡は諸家の說を異にして、コレスピー氏は綠色鏡、アダムス氏は青色鏡を良しとして居るが、私の病院では、彼の天然の空色で成るべく大きな甲狀眼鏡を使用して居る。世には眼鏡は能く調節機の疲勞を調節すると云ふ誤見からして、健眼に種々の眼鏡を亂用し、中にも甚だしいのは凹面鏡を裝うて學者を氣取らうとする結果が、却て眼を惡くして近視又は弱視などになつたり、又は視力が減弱したからと云つて私に眼鏡屋から求めたりして、却て眼を甚く惡くするのがある、そんなことをしないで必ず、眼科醫に診斷を乞ふて後、其の處方箋に依り、眼鏡を買ふが良い。

一九　第十八衣服の清潔を貴びたい

凡て衣服は其の品質如何は第二の問題で、先づ第一に最も注意することは、清潔如何である。然るに我が國の俗習たる、其の品質の美華を競つて、却て最も大切な注意をしない。汚れた絹布服でも絹り立ての木綿より宜しいと云ふ弊がある。甚だ慨はしいことである。元來被服の不潔は皮膚の不潔を助け、體温の放散を妨げ從つて病氣の源因となるものである。特に眼の衛生から云ふと、汚垢に滿ちた袖や前掛などで、眼瞼を擦つたりすると、直に病菌を受けることがある。獨逸國あたりは汗ジミタ新衣よりも、假ひ洗ひ晒しの古衣でも清潔のが宜しいと云ふやうに、衛生を尊ぶ社交の習慣がなつて居る。我が國もさうなければならぬと思ふ。

二十　第十九淋毒、黴毒に感染せぬようするが良い

淋病に罹つて居るものの尿道より出づる膿液の中には、ゴノコッケンと云ふ實に恐るべき黴菌があるから、其れが何かに附着いて眼にでも入ると、ブレノレーと云ふ恐ろしい急性眼炎、俗稱瘋眼を發して早く治療を施さぬと、角膜を浸蝕して終には盲目となる。東京眼科病院の統計表でも、瘋眼よりのものは、盲目の第二位に居るのである。東北邊土の或村落に於て衛生觀念の皆無なる所で、淋病に罹つた一青年は、小便で眼を洗へば淋病が治ると云ふ冗談を信じて、さうしたら直ぐ瘋眼となつて、驚いて醫師にかけ附けたけれども、盲目にナッテ仕舞つた例がある注意せねばならぬ。又黴毒は其の先天性であると否とに拘らず、眼病に大關係を有し、然も貴重の部分を浸すものである。假へば虹彩炎、脉絡膜炎、毛樣體炎、網膜炎、視神經炎、角膜炎等に惡性の疾病を發し、其の經過は頗る長く多くの日數を費し、其の上に難治の虞がある。殊に今迄の疾患あるものは、直に之を助けて增惡せしめ往々失明の不幸を招くものがある。彼のミルリングン氏が、失明者の十四%は、黴毒に因るものであると斷定したのを見ても、驚くべきことである。先天的黴毒の特兆は、ハッチンソン氏の言の如く、前齒の異常の不整列、門齒下掾の缺損等の外、長骨の肥大、膝關節の水腫、重聽、頸部淋巴腺、扁桃腺の肥大或は潰爛、虹彩癒着症等で殊に婦人は流產し易く、產生しても成育は不十分である。此の忌ひべき厭ふべき怖るべき黴毒は、社會風紀の紊亂より來るが、唯一の源因であるから、國家は宜しく其の源泉を清めて下流を正すの策を講じ、又各人は自己の操行と衛生とに嚴戒を加へ、一は自家子孫の爲、一は國家公衆の爲に此の忌ひべき、病氣を根絶するやうせねばならぬ。

二一　第二十早婚と血族結婚とに注意するが良い

早婚と云ふことは、身體未熟にして生殖器も不完全であるから、第一自己の身心を害し、強健なる子女を得ることがむづかしい。我が國に古來早婚の弊のあるのは、戒ねばならぬがさりとて晩婚を奬勵するのではない。男女共に廿歳以上に至つて、身體の發育を遂げたものに結婚させるが良い。斯ることは、世人輕々に看過するが、其れは大なる間違である。最後に最も恐るべきことは、血族結婚の弊風である。近親血族の結婚は多くの場合に於て、忌はしい結果を招き、近視、弱視、色素性網膜炎(俗に鳥目)視神經萎縮等を遺傳する虞がある。此の說には反對は殆どないと云つて宜しい。殊に近親結婚の爲には、聾啞と色素性網膜炎が最も多いと云ふことは醫學者に一人の反對者はない。歐米大家の調査に依ると、色素性網膜炎三〇%、聾啞二〇%は、血族結婚間の兒童であると云ふことだから、子孫苗裔の爲、將た國家將來の爲に、畸形兒、聾啞、盲目、狂者を增加せるが如き、我が大和民族の消長に關する惡風習は、苟も眼中家あり、國あるものの深く警戒したいものである。

第二四章　大正二年英獨再遊通信

ドクトル　井上豐太郎

伯林は二十年前予が留遊の當時とは、其の社會的方面の進步は勿論、醫學研究上諸般の設備も亦改善整頓致し居り候。地下鐵道等の交通機關と共に伯林市は益々擴張し、其の區域の增大せし事、前年の約三倍に候。

最近統計の示す所に據れば、小伯林の人口二百八萬二千五百餘人、宗教は大部分プロテスタン(新教)にして、カトリック(舊教)十二%、猶太教五%を占め候。又市廓六千三百五十二平方トートル、一、一五平方哩に建築されたる五層樓の建物二萬七千二百餘にして、其の借地料三億萬麻克に値し、一平方キロメートルに對して平均三萬二千餘人の住民に當り、一千以上の各町に分れ、其の土地、住民の衛生狀態及び家屋の保存等には多大の注意を拂ひ、年々建築を堅牢にして、市街の改造に腐心し今や歐洲第一等の都市たる機運に向ひ居り候。市が如上經營の爲に昨年度に支出せる經費概算三億三千麻克、其の主要なる支出を擧ぐれば左の如くに候。

教育費	三千九百萬麻克
貧民救助費	二千萬麻克
疾病者救助費	二千四百萬麻克
警察消防費	一千二百萬麻克
市街清潔點燈費	一千萬麻克

土木費　一千九百萬麻克

行政費　二千一百萬麻克

而して市債實に三千二百萬麻克を要すと申し候、是れ伯林市廓大の事に候得共、其の聯合に係る附近の區域を合同せる大伯林市の人口は三百八十萬餘人と稱し、其の區域を區分する時は、シャルロッテンブルグ人口三十萬八千、ノイケルン二十四萬七千、ショイネエベルグ十七萬三千、ウィルメルドルフ十一萬、リヒテンベルグ十三萬三千を算し、此の六市を合同して大伯林市とは申し候。現時の趨勢にては年と共に市の盛大膨脹し行くこと眞に驚くべきもの有之候。

當時皇女ビクトリヤ内親王オルデンブルグ太公と御結婚の爲、英國皇帝皇后兩陛下及び露國皇帝陛下御滯伯、今明日御滯在の爲市中は一般に賑ひ居り候。皇女の御結婚に隣國元首の來訪あるを見ても獨帝の歐大陸に於ける勢力を知るに足るものあらんと存じ候。

獨逸帝國の進運上吾人の大に注意すべきは、教育施設の完備、且其の盛大なる事に候、内二十一個の大學生總數獨逸人五萬三千六百五十一人、外國人五千百九十三人、而してこれを各大學別にすれば

ベルリン大學	獨逸人	外國人
	八二〇一	一六〇五
ボン大學	四〇三五	一四四
ブレスロー大學	二五四八	一六二
エルランゲン大學	一二二九	三二
ギーセン大學	二四八六	五二
ゲッチンゲン大學	二四八六	一七四
グライスワルド大學	一二三三	二七
ハルレー大學	二五九一	二七
ハイデルベルヒ大學	二〇〇〇	二六四
イエナー大學	一七〇二	一四〇
キール大學	一七一一	二七
ケーニーグスベルク大學	一三七二	二四四
ライプチヒ大學	四五六七	七八四
マールブルヒ大學	二〇〇八	三〇
ミュンヘン大學	六〇七二	六八七

ミユンステル大學	二一四七	七	
ロストック大學	八五七	二四	
ストラスブルグ大學	一八七三	一九一	
チユービンゲン大學	一八六〇	三八	
ウユルツブルグ大學	一四二四	三一	

と相成り其の外國留學生は露國の二千八百四十人を第一位とし、第二が墺國の九百人第三シユワイツの三百四十人、第四米國の三百三十八人、第五東洋人の百八十四人、次が英國の百四十五人、ルーマニア百三十六人、ブルガリア百十一人、希臘の百人、土耳古の七十八人、佛國の五十三人等の順序にて、モンテネグロの一人を最少と致し、全世界より集まり來れる有樣、殆んど人種博覽會の觀有之、頗る盛んなる者に候。

予等は五月五日に入學式を終り、スチウーデントカルテの番號五千五百二十と有之、而して東洋人の中多數を占むるは矢張予等日本人にして、最も體軀短小との評はあれど、予の如き老書生も是れが爲、左程目立たざるは仕合に候呵々。

我々邦人は悧巧な人種であるとは、一般に彼等の口に上る所に候、予等の師事せるクルツクマン教授の講筵の潑溂たる常に聽講生五百人、實に近代學界の大立物と言ふを憚らず候、教授の年齒正に四十八歳この歳にして當伯林大學の部長たるは異數の榮達なりと、人皆噂さ致居候、一度び獨逸國に笈を負ふ者、其の專門學科の何たるを問はず、この教壇に師を見ざる者は、伯林醫學を知らざる人と稱して可ならんと存じ候、其の講義の熱誠に富める結果は、師の教室一寸の餘地なく學生にて充溢せるを以ても之を知る可く、實に盛んなるものに候、言ふ迄もなく獨逸は、本邦とは大學制度に於て大に異なり、大學の選定は一に學生の自由に任じ居候へば、假に教授其の人を得ざらんか、其の教室は甚だ寂寥たるものに御座候。

之れと相對してグレーフ教授の如きは、一言以て他を威壓するに足る溫行篤實の君子人に候、クルツクマン教授とのコントラスト亦奇遇とや云はまほしく候。

如上は唯着伯以來見聞の概略に御座候、次便には學界の事共何彼と御報可致、茲に擱筆す。（五月二十三日伯林大學にて）

生は伯林大學より轉じて往時最も長く留學せし民顯大學に參り候處、其の當時の助手諸君今は皆正教授に昇り居られ、恩師なる眼科の「ロートムンド」衛生の「ペッテンコーフエル」內科のチームセン三先生共に、今や既に故人となられ、其の名は孰れも町名と相成り居候、「ロートムンド」先生の高弟「エ

フエルスブッシュ」氏は、「エルランゲン」大學より同先生の後任として民顯大學に教授となり、其の當時助手なりし「オエ.ル」君代て「エルランゲン」大學の眼科正教授に任じ、「シツルッセル」君は民顯に殘り、今猶眼科の助教授に候、「エブエルスブッシュ」氏の「エルランゲン」大學部長たりし當時、新眼科病院を設計して、二十年前の獨逸に於ける模範的病院の稱有之候ひしが、後民顯大學眼科部長に轉じてより當地にも眼科病院の新築を企て、現今既に竣成しつゝあるも、氏は其の完成を告げざる、昨年物故せられ、其の新病院には氏の紀念像の建設有之候、實に氏は病院設計に對し特得の手腕を有せる人にして、其の建築上の創意を一見して、慘澹たる苦心は吾人の多とする者に御座候。當民顯大學眼科の規模宏壯且設備の完整せるは、現今獨墺兩國を通じて恐らく第一位ならんか、其の建設費のみにて五百萬麻克(我が二百五十萬圓)を要し候由、諸事完全して寧ろ贅澤なりと評する人も多からんかと存じ候、診察室、病室、試驗室、浴室、炊事場に至るまで、一として施設盡さざるなく就中浴室の如き電氣浴、蒸氣浴、炭酸浴等の設けありて、毫も間然する所なく、これを精細に見學するには、優に一日を費すも尚其の足らざるを覺え申し候、今夏學期よりは部長として「ウユルッブルク」大學の眼科部長たりし「ヘース」先生來任、目下諸事整頓中に有之候へば、將來は病院の構造設備と其の役者と共に備はり、當分獨逸大學各眼科教室の覇王たるべく候、其の他內科も耳鼻咽喉科も解剖教室も、何れも新築成りて舊時の面目を一新し、目下婦人科產科の病院も新築起工中に係り、兩三年中には落成の由、當民顯醫科學生の多き伯林大學の二千二百卅九人に對し二千二百八十九人(昨年度の統計表)と云ふ數を示し、醫科は先づ以て獨逸諸大學中最も全盛なる者に候、併し形態に於ては前年に比して斯く美麗なるも若夫れ其の役者の點に至つては、二十年前の人物揃ひに比して稍々物足らぬ感なきにあらず候、唯曾遊時代に比較し全く異なりし點は、醫科自己の創意に非らざるも、科學界即ち理工科製の產物を巧みに醫學界に應用致し居り候一事にて、顯微鏡製品の如き將た手術に「ツアイス」式電氣裝置を應用せる如き、其の他理工科殊に電氣工業の發達、飛行界の進步發展の如き、實に科學界の生產物たらざるはなく、從來我が日本より獨逸に留學する人は醫學者、軍人等其の多數を占め居り候ひしが、近き將來に於ては必ずや理工科志望の留學者益々其の數を增し、我が國も亦此方面の發展に力を盡す時代となるべきこと、炳乎として明かに候。

來る八月七日より十二日迄英國倫敦市に於て開催の第十七回萬國醫學大會には生も出席の心算に候間、次便は多分英國より啓上致すことゝ可相成と存じ候。(七月二十九日)

去る七月三十日は畏くも、明治天皇陛下崩御の御一周に當れば、當民顯に於ても留學生一同は日本人會幹事木下、三浦、藤原三氏の斡旋にて式場を整へ、先帝陛下の御聖影を正面に奉掲し、日本酒を供

へ、謹んで遙拜式を擧げ式終つて一同紀念の撮影をなし、折柄來遊中なりし貴族院議員鎌田榮吉氏の奉悼演說有之候ひしも、生は紀念撮影を了ると共に、直ちに英國倫敦市に開催の第十七回萬國醫學大會に出席の爲め民顯を發足致し候、斯くて途中「ボーン」大學に立寄り、同大學眼科に世界有名の敎授「クント」師を訪問し同師の許に兩三日滯在見學致し候。同大學の所在は「ライン」河に沿ひ風光絕佳の地に候。校舍の建築物は舊時其の儘にて、特に記す可き程の者も無之、唯眼科部のみは最近の築造なれど其の規模小にして間口二十四五間、奥行も至て狹く僅々七八間に過ぎざる三層の建物、一階を「クリニック」診察室、手術室、患者控室等に充て二階は凡て病室にて、入院患者中遙々露國より「クント」先生の名聲を慕ひ來つて、治を乞ひ居る者も見受け候、「トラホーム」患者の診察所及び其の入院室は同建物中別に一區域を畫くの制を執りあり、白内障手術に角膜切開を施し、其の創孔を結膜を以て被覆せるものを特に指示せられ候。八月二日午後同地を發し、四日早朝には英國倫敦市に着し候。

四日朝「バイドバーク」公園に沿ひたる「ローヤール、アルベルトホール」即ち萬國醫學大會事務所に至り、入會の手續を了し候。(入會者は一人一「ポンド」宛を拂込む) 入會番號は六千三百二十五號、銅製の會員章を受領致し候ひしが、五日の締切迄には七千五百餘人を算するに至れりと聞及び候。當初七千人の豫定にて其の設備をなしたるに、入會者豫定人員を超過し會員章にも不足を告げ止むなく、一時假の徽章にて其の場を繕ひたる程の盛況、我々日本人の參會者も各科を通じて六十人以上に達し申し候。

八月六日午前九時愈々會衆は式場に參集し、同十一時「コンノート」殿下司會の下に盛んなる開會式有之、先づ「プレジデント」バーロー書記長「ヘーリングハム」中央に座を占め、書記長より各國代表者の姓名を呼び上げて握手し、外務大臣の祝辭、會長の演說、各國政府代表の祝辭朗讀有之、我日本帝國の代表者としては藥學博士高峯氏英語を以て一場の挨拶を述られ候。此日は十二時式を了りて、一旦散會し、午後五時三十分より本會講演を開會致し候。(講演者は内科に就て巴里の「シャウファルド」敎授) 七日は午後二時より(外科に就て「ハーバード」大學敎授「クーシング」氏)八日も午後二時より (病理に就いて「エールリッヒ」氏 (十一日、十二日にも同時刻より「バーラツン」氏、「ヨーンブルンス」氏其の他の講演有之候ひしも、生は分科會の都合にて參聽不致、七日よりは各分科會開會、眼科は午前九時半より連日開會し、幾多の討題に就て講演有之、又各自の研究と實驗とを數十氏一人五分間宛を限りて演說、聽く者も殆んど退屈の位に候ひき、十一日民顯の眼科敎授「ヘース」氏の講演了るや、分科會場の庭園に於て各國參列者一同紀念撮影を致し候。本會開會式の翌七日には一同園遊會に招待せられ又九日には分科會長より分科會員に晝餐の招待會有之、十一日には植物園に於て夜會を催し會員、一

同招待を受け、又會員章を佩用するものは、市中到る處の展覽會場或は博物館等を隨意縱覽せしむるの便宜を與へられ、生は日々分科會の閉會後地下鐵道を利用して、各所に赤毛布を極込み候。其の見聞に依りて察するに、當英國の富は到底大陸に於て見ることは得ざるものと存ぜられ候。

就中「ブリチッシエ、ムゼウム」の如きは、東洋、印度、支那、埃及及び土耳古の重寶物を陳列し、獨逸にては到底見得る可からざる者のみに候「ビクトリア、ムゼウム」には我が日本の品も隨分有之、繪畫、武器殊に刀劍、古器物等凡て重寶の品多く陳列しあるには驚嘆の外無之候。病院の視察としては「トーマス病院、ロンドン病院」「チチーブローヤル」眼科病院を參觀致し候。「トーマス」病院は「テームス」河畔に在り、其の宏壯なること是れ亦大陸に於て嘗て見ざる所、病室の如き一室五十人を收容し得る者數十相並んで、南北に別れ居り、其の擔任者の如き該部分以外の人にては、尋ぬるも實際判明せぬ程にて、患者控室の如き其の廣さ我が新橋停車場階下全體の數倍有之、尙院内に病理標本の陳列場あり、至て盛頓致居り、就中婦人科に關する標本は特に余の注意を挑はしめ候ひき。

轉じて「チチーブ、オブタルモローギッシエ、ホスピタル」に到りて見學致し候に、緑内障手術患者のみを收容する爲の病室階の上下に男女を分ちて、一室四十個の「ベット」並び居り、白内障手術患者を收容する病室も亦同大にして、男女を分ち別室となしあり、「**トラホーム**」患者の診察所入院室治療所等別に其の設備有之候、同院内に於て特に注目に値する者は、眼科に關する標本と器械との陳列場に御座候。此處には現に其の使用するとせざるとに論なく、各國大家の創意に成れる總ての眼科器械を陳列し、中に我が恩師井上達也翁創意の「カタラクト」刀をも見出し申し候、井上翁が斯學に忠實熱心なる眼科の大家たりしは、今眼前此の英國の大病院に於て創意の刀を見るにつけても懷舊の情に堪えず、腦裡翁の髣髴たるあり、低徊去るに忍びざること久しかりき。

生は八月十二日倫敦「チャーリングクロース」停車場を發して翌日は白耳義「ゲント」市に到り、目下同地に開催の萬國博覽會を見物致し候。佛人、英人、獨人等にて場内頗る雜沓し、各館の廻覽に便ならしむる爲、特に電車を敷設しあり、佛國出品館は英國出品館と相對して競爭の觀有之、其の器械館の如き、二十世紀文明の科學が產み出したる嶄新の諸機關を洩さず陳列し、各器關皆動力に依り運轉して活動を示し居り候。生は場内の大體を通覽して、翌日は獨領「ケルン」市に着して一泊、翌朝「ケルン」を發して夕刻「フライブルグ」市に着、二日間同地の大學を見學致し候。「フライブルグ」市は東北に城山を負ひ、西南に展開したる頗る衛生的に且温暖なる中都市に候。東北の城山には三個所の城跡ありて、此處より市中を俯瞰するに其の絶景言ふ可からず候、同地大學眼科部に「アクセンフェルド」教授を訪問したるに、同教室には東京の甲野斐氏令息外一氏研究中、其の他日本人は各科を通じて約

十人との事を承り候。大學は民顯などに比すれば小規模なるも、唯同大學の精神病院のみは一異彩を放ち居り候。「アキセンフエルド」教室に於て反射裝置の視力計測器を見、其の嶄新なるに首肯せる外特に報ず可き者無之、十六日同大學を辭して「シユワルツワルド」の深山の絶勝を車窓より眺めつゝ、同日の夕刻無事民顯に歸着仕候。

乍序申し候は生今回の再遊は、二十年前の曾遊時代に比し有形的多大の稗益を得候。日本人も前年とは異なり、到る處の大學に在て、其の多きは數十人、少なきも二三人を逸せず、相互競爭的に勉勵致し居られ候樣なれど、餘り競爭の激烈なる爲か劣敗者は反て、裏面運動をなし其の卑劣言語に堪えざる手段を弄し候者も有之、本年五月頃の某誌と記憶致し候が、「獨逸留學生の論文買收」云々の記事二回に亘り散見致し候事有之。斯る記事が萬一獨逸諸大學教授の目に觸れ耳に入り候曉は、折角教授連が熱心に我々日本人を指導し呉れ居り候今日、該記事の爲に教授連の惡感を惹き、將來我が後進學者の不利益は言はずもがな、延ては帝國の學術の爲にも惡結果を來さずとも限らず候。苟くも操觚者として社會の木鐸たるの重任を自覺する以上は、縱令斯る記事を投寄する鼠輩ありとするも、能く其の實否と出所とを精探して、後登載する樣被致度者と不圖思ひ浮び申し候（大正二年八月十七日）

予は頃日小閑を得て墺國維納の「フックス」眼科を訪ひ、終日「クリニック」を傍觀致し候。

必ずしも此の維納大學に限らず、獨逸各大學共に、予の曾遊二十年前の如く大家の割據は見當らぬ樣の感有之候、予が曾遊時代維納大學に於ける眼科のステルワーグ、內科のノートナーグルは云はずもがな、腦神經科のクラフトエービング等名聲ありし教授連は悉く既に故人となり、唯其の當時末席の正教授たりし眼科のフックス先生今は六十歳以上にて主席の老教授として、鑛鑠として其の任に當り居られ候のみ、其の外には往時腦神經科の生理及び病理學助教授たりしオーベルスタイネル先生今は正教授の古參として其の任に當り、同先生はフックス先生よりも高齡にて六十六七歳かと覺え候、先生の教室は折柄留學中なる柳河醫學士の案內にて隈なく參觀致し候、是迄日本人にて同師の教室に於てアルバイトに從事せし人も澤山ありしなど、助手より承り申候、博士製造所の觀ある樣に思はれ候、又眼科に於ては廿年前一助手たりしジンマー氏、今は教授として維納大學眼科の二部長たり、予は氏の教室をも訪ひたるに、氏は快活に往時を談じ、先年は日本の河本氏も亦來訪せられたりと申し候。又懇切丁寧に手術室、診察室、病室、講堂等を案內せられ候、暗室には時價五千麻克と云ふ眼底檢査裝置も据へ付けられ、大講堂にベール先生の肖像あり、同氏語て曰くベール先生は千八百十八年の頃かと思惟す、當大學の眼科を創設せし開祖なりと、思ふに他に隷屬せし科を獨立せしめたる勇者かと

覺へ候。維納大學の眼科部は古建築にて、獨逸の嶄新築造の病院を見たる眼には、幾分物足らぬ感有之候。併しこれは各科全部の事にては無之、婦人科、産科、耳鼻咽喉科、内科、小兒科等順次高臺の好位置を占めて、新築成り就中婦人科教室を參觀致し候に、中々宏壯且充分の設備に見受け申候、前年度の帝王切開術二十名なりと助手は語り申し候、近く眼科も改築の由に候。つぎ〳〵に觀察致し候獨逸の各大學は、大概系統一致し居りて一箇所のものを見學すれば、他大學を見るも大なる差は無之樣に候、ケーニヒスベルグ大學にても伯林大學にても略同樣にて、手術室はツァイス式の電氣採光裝置、手術室を暗くし窓掛は矢張黑布にて何れの手術室も外傷の多數を見受け、ハープ式の大磁石電氣器据付けあり候、是れ全く工業の盛んなるに從て、鐵工場多き爲めに候、予は伯林大學にても度々其の手術を傍觀し、「シャリテー」病院グレーフ先生の許にても三、四回硝子體内に竄入する鐵片除去術を見受け申し候。

今日迄の見學中唯異とせしは「ケーニヒスベルグ」大學に於ける「トラホームハウス」にて、同大學にての附屬として別に一棟の「トラホームハウス」新築しあり、病室も治療所も一切此の四階建の一棟の裡に收めて、全然他の患者と隔離しあり一週一回「シック」教授、他は「ブリワートドッチエント」「クラウセン」氏が擔當し居られ候、同氏は特にトラホーム治療に對し忠實に研究され居り、必ず未來の教授たる人に候。

伯林に於ける二十年前の「ウィルヒョー」先生は實に旺盛なる活動的學者なりしが、今は「カールブラッツに大なる「デンクマール」となりて、偉名を千歲に輝かし候、又「ウィルヒョー」「ミュゾイム」設置せられて諸種の病的標本幾千を陳列し、其の研究當時の苦辛、今人をして驚嘆せしむる者有之候。翁が其の始め病理研究に使用せし顯微鏡も出陳しあり、一見するに實に粗雜の者に候、之を見ても人の事業は器械に非らずして、手腕にある事と不撓不屈の活動にあることを深く感じ申候。

其の他「ウィルヒョウクランケンハウス」も市の事業として一偉觀にて、「コッホインスシツート」「ラゲンンベック」「クランケンハウス」「ウキルヘルムインスシツート」等と共に後進に奬勵的遺物として大なる價値ある者に候。

先年予等の在學當時は民間にビスマルク翁あり、頻りに皇帝の政策に反對し地方都會を遊説し歩きて地方新聞を賑し居り、小生も「イエナー市」に於ける翁の野外演説の壯觀を記憶し居り候一人に候が今は即ち皇帝の獨逸臺にて、何か淋しき樣に感じ申候。（大正二年八月二十二日伯林大學にて）

第二篇　終

大正六年十二月十七日印刷
大正六年十二月二十日發行

【定價金貳圓】

第二編

著作者　東京市神田區淡路町二丁目一番地　ドクトル メディチーネ　井上豊太郎

發行者　東京市神田區淡路町二丁目一番地　中野勝永

印刷者　東京市京橋區本湊町十三番地　渡部清治

發行所　東京市神田區淡路町一丁目一番地　泰山房

振替東京九〇七九番

不許複製

終